

501
257



始



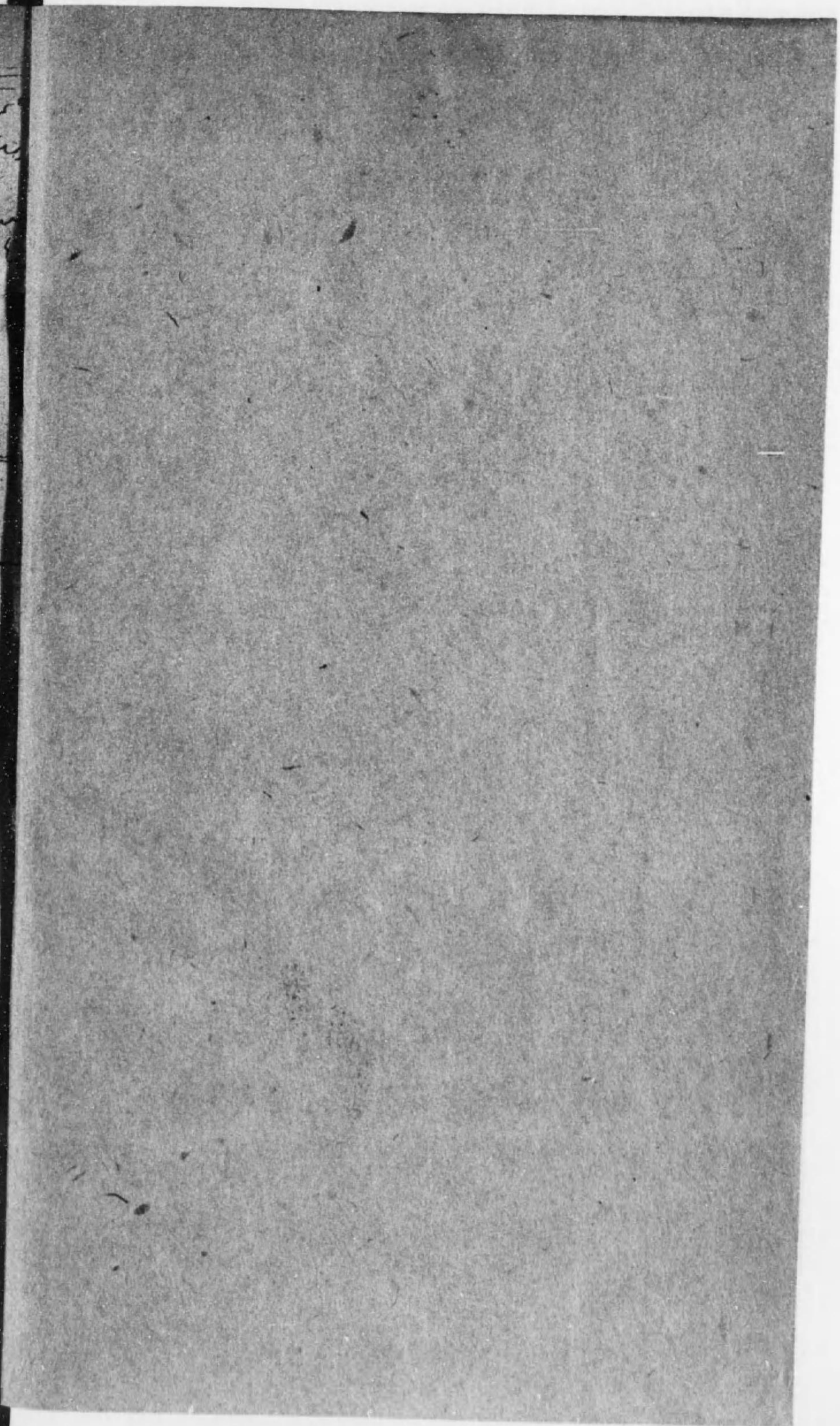
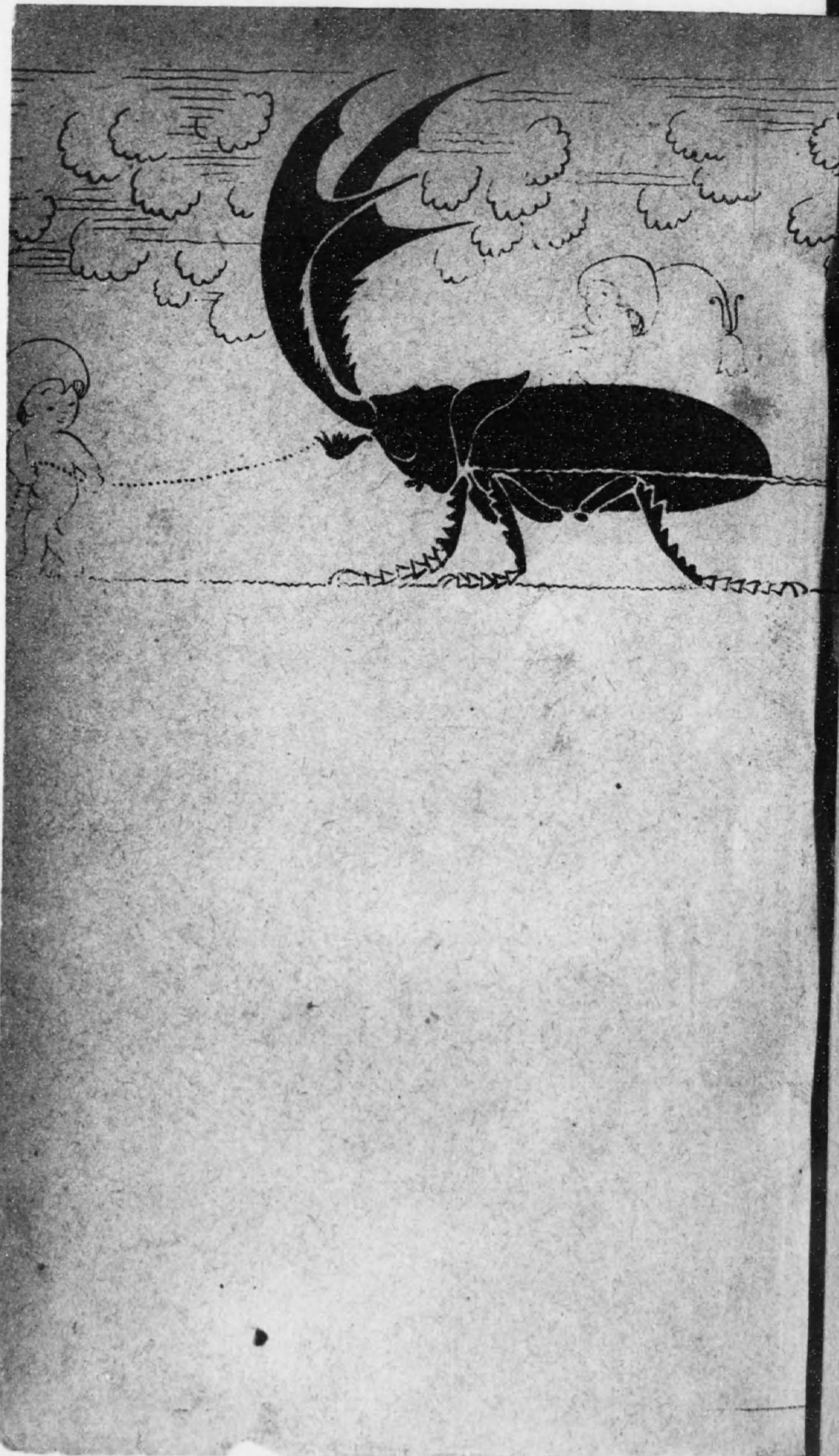
501
257

後藤江村著
丸尾至陽畫
童話選集

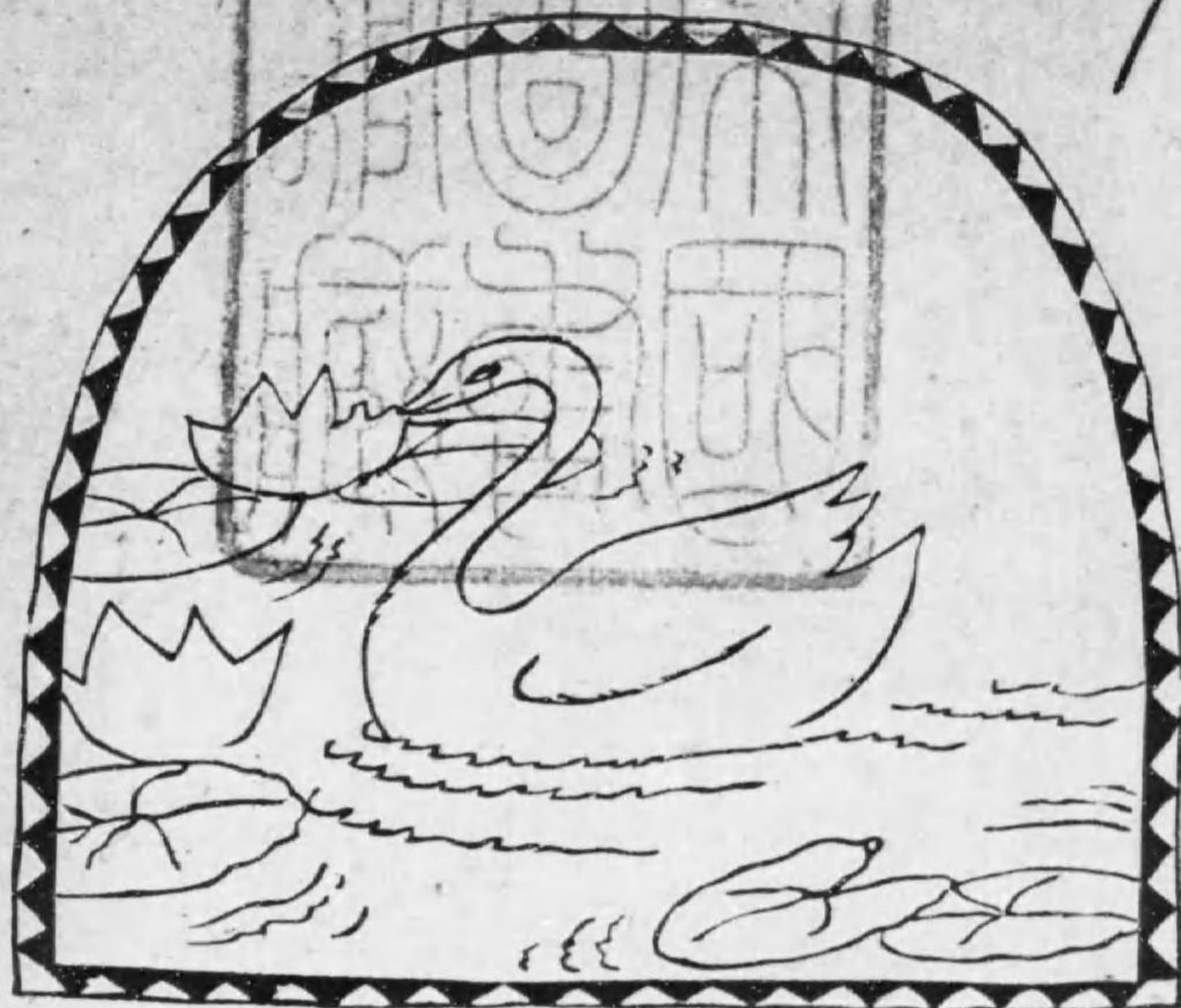
銀の鈴



至



501-257



童話
選集

銀

の

鈴

大正
10 12.23
内交

目次

夜の村里……(新體詩)

森の兄弟……(童話)……一

廢坑……(童話)……二

夢の御國……(童話)……三

大力太郎……(童話)……四

風の神様……(童話)……六

小人の國……(童話)

魔法の笛……(童話)……八

✓ 裁判の鐘……(童話)……一九

ばつたさん……(童話)

籠つるへ……(童話)……二七

慾ばり粉屋……(童話)……二四七

シャボン玉……(童話)

三つの希望……(童話)……二五

兎の王子……(童話)……二七一

駱駝と狐……(童話)……二〇五

——(なはり)——



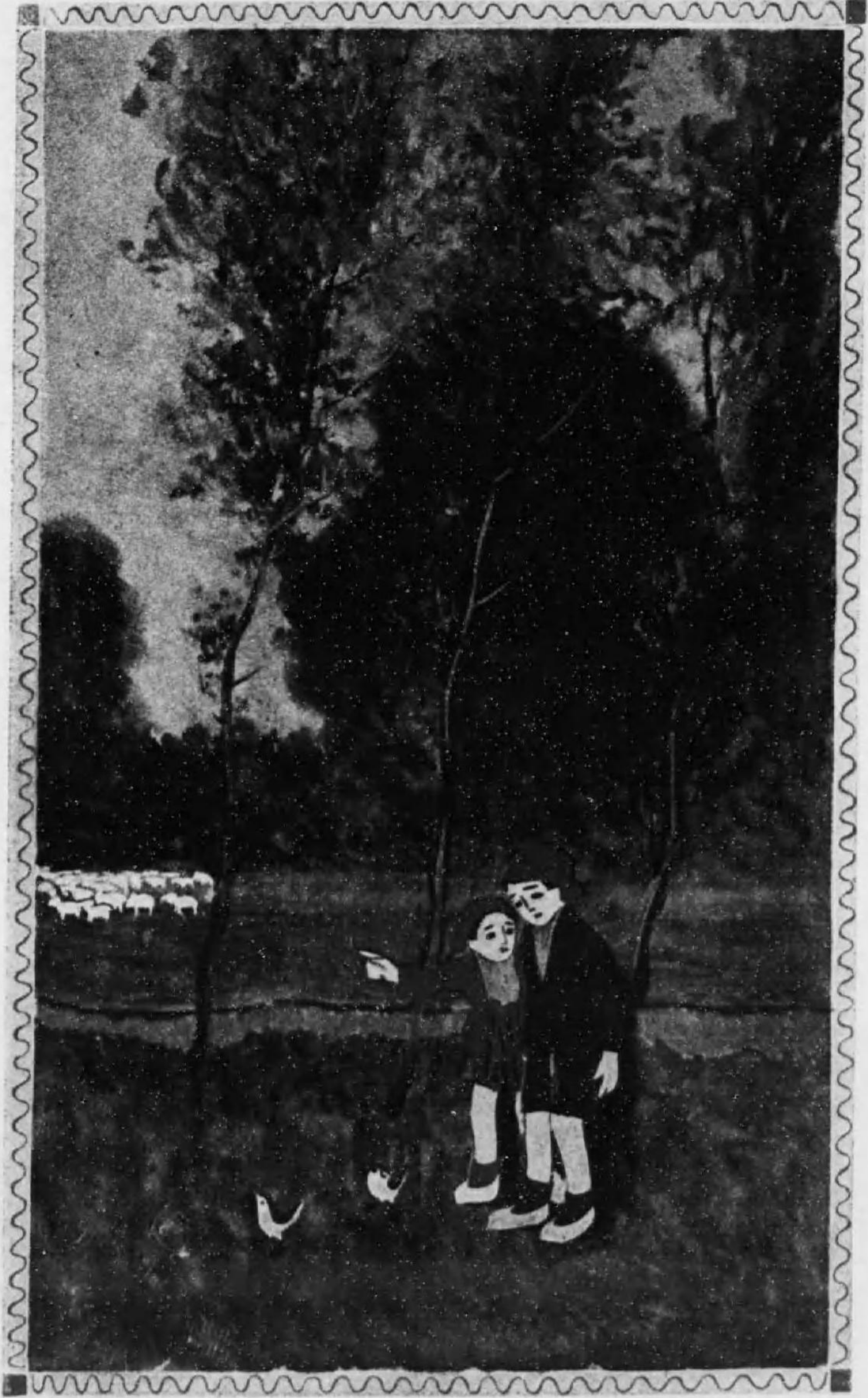
森の兄弟

春になりますと、青葉がくれの梢から、鶯のやさしい小唄がこの幼い兄弟の胸をどんなに慰さめてくれたこととせう。

「お母さまのお聲は、あの鶯の唄のやうに、おやさしかつた。今でも細い

お唄の唄きが耳の中このこつてゐます。」
物語りする兄の胸もそれに聞き入る弟の胸も、たゞなつかしさにみなぎつて、やさしい鶯の音律に息をこらしてき、惚れるのでございました。ひろい緑の平原には、消え残つた雪のやうに、ま白い羊の群れがたのしやうに遊んで居りました。絹糸のやうな柔い細い牧草を食べて日ましにそだつてゆく羊のやさしい眼が、お父さまのお目によく似てゐると聞かされた弟は、どんなにその小さな瞳を輝かせたこととせう。

「羊はきつと神様の御使ひでお父様やお母様のお出でになる月の世界から来たのだ。」二人はいつもさう思つて居りました。



銀の鈴綱領

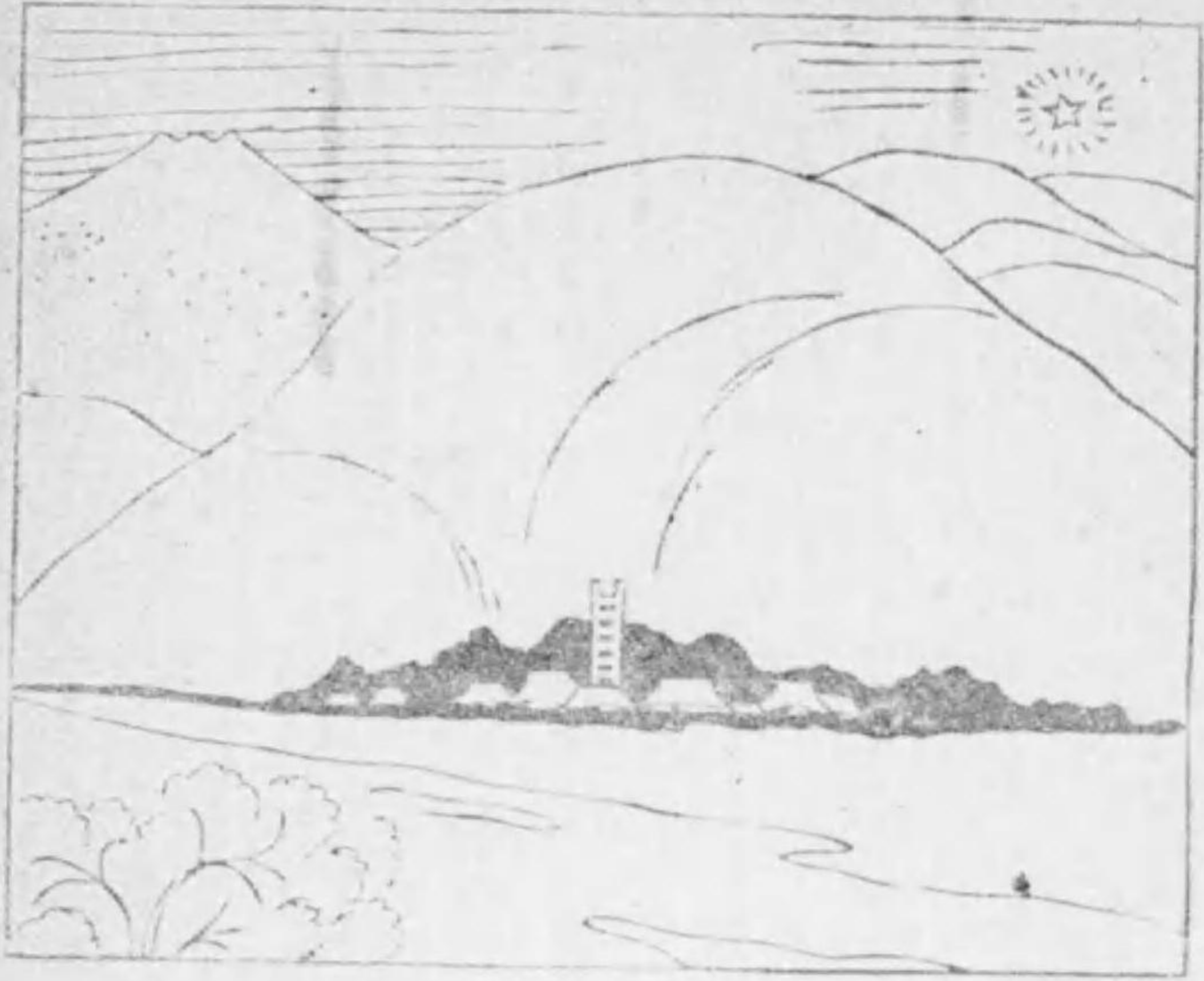
△私^{わたくし}たちは児童^{じど}の讀物^{よみもの}として、中々^{なかなか}たくさん^{さん}の數^{かず}を見受^{みう}けます。然^{しか}しそれ^らの多^{おほ}くが、ほんとの児童^{じど}の讀物^{よみもの}として適^{てき}當^{たう}なものかどうかを考^{かん}へると心細^{こころほ}そくてなりませ^ん。

△児童^{じど}をおもちやとすることは大^{たい}へん憎^{にく}むべきこと^{です}。児童^{じど}の相^あ手^てとして児童^{じど}と一^{いっ}しよに適^{てき}當^{たう}なものをつくらねばほん^{ほん}のものはでき^{でき}ないでせう。

△児童^{じど}には児童^{じど}の藝^{げい}術^{じゆつ}が^あり^あります。今^{いま}までの多^{おほ}くの児童^{じど}讀物^{よみもの}は多^{おほ}くそれを輕^{けい}視^ししてき^きました。私^{わたくし}たちは、ど^どこま^こでも児童^{じど}の藝^{げい}術^{じゆつ}に立^た脚^{きゃく}して、極^{ごく}めて純^{じゆん}な貴^たい児童^{じど}の本^{ほん}然^{ぜん}の心^{こころ}に培^{つち}か^かつて行^ゆくことに努^{つと}めたいと思^{おも}ひます。

△兒童の要求、本性に順應した讀物を作ることが吾々の綱領です。それが飽くまでも私たちのとるべき唯一の大道です。

△卑俗的な功利的なもの、餘りに多い少年讀物界に、新主張と新傾向を持つて生れた「銀の鈴」が普ねく世の中の少年たちとその家庭の人たちに推賞されることを祈ります。



夜の村里 (江村)

月の光に照らされて

静かにねむる夜の村

銀の流れのチカラ

うつる灯影をのせてゆく。

あゝこの時よ、この夜半に

月と語らむ世の中の

うつりゆくなる さだめごと

いざや語らん月夜よ

七軒村の夢なのぞ

沼津に通よう村野の水

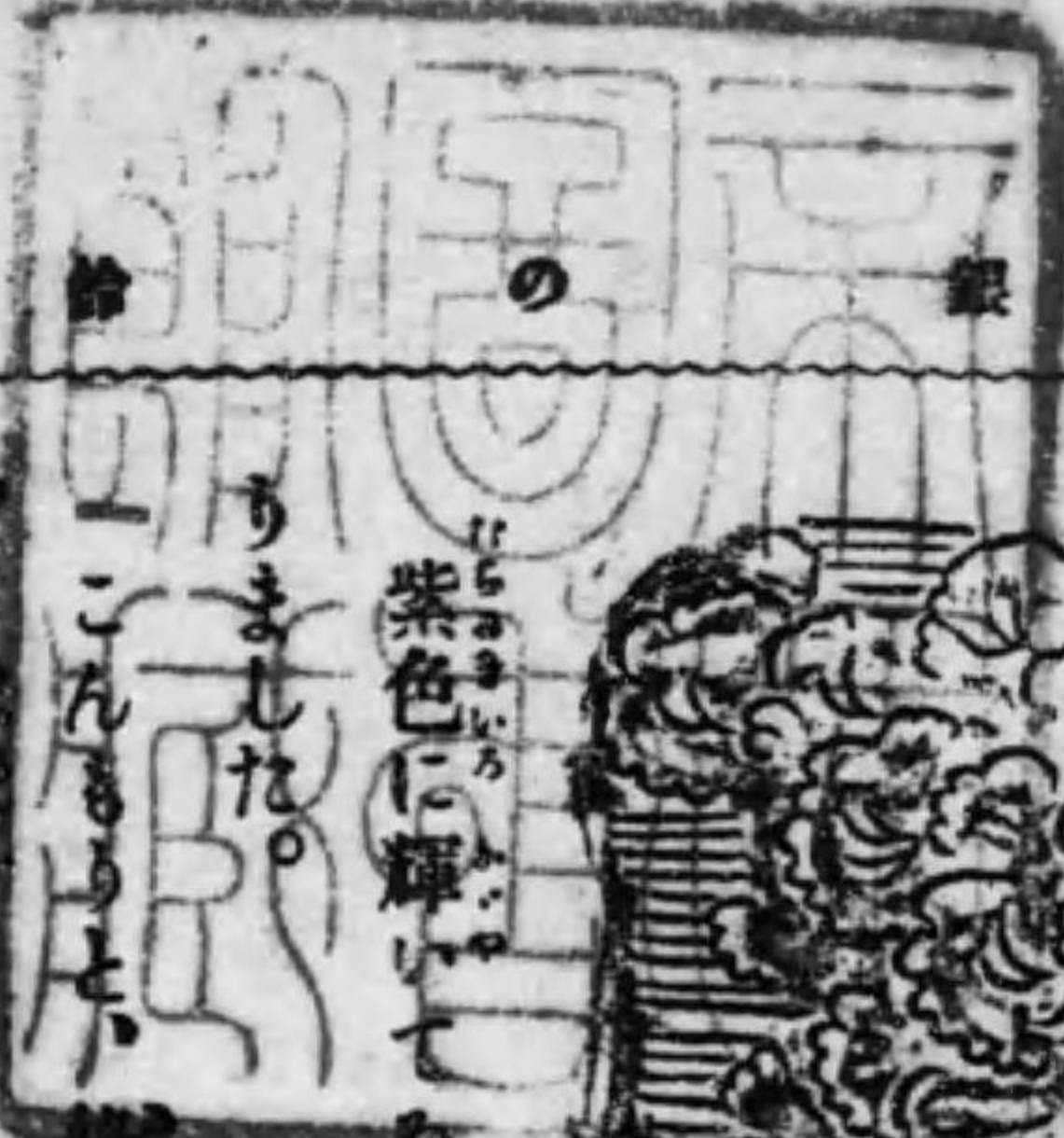
小山も草も木も花も

夢を結ぶが聲しなし

童話集 銀の鈴

後藤江村

森の兄弟 (童話)



紫色に輝いてゐる、遠くの高いお山から朝のお日様が優さしい笑顔をお出しにな
りました。

「こんもりと、緑のひろい葉をもつた大木の森の中で、静かな夢路を辿つてゐた二
人の兄弟は、この時その安らかなねむりからさめました。

そして、おさへきれない喜びを二つの小さな瞳に輝かせながら、また漂浪の旅路
をつづけるために、ひろい果てもない野原の小路へさまよひ出ました。

見上げる高い梢には、黄金色した梨の實が枝もたわむになりすだれてゐます。葉かげに遊ぶ赤い小鳥たちは、さも楽しさうに『朝の悦び』を唄ひつゞけてをります。いく日も、いく日もつづけて、名も知らぬ森や林を通り越してきた幼い二人の兄弟は、またこれから繪のやうに美しい野原の小路を、まだ見ぬ新しい森へと、白い鳩の行衛をたづねてまゐるのでございました。

なつかしい白い鳩をさがすためには、そのなやましい漂浪の旅路も、幼い二人にはどんなにかうれいしものだったのでございます。

二人の兄弟は、かわいさうな孤兒だったのでございます。二人のお父さんもお母さんも二人がほんの小さなじぶんに、天國の神様のお傍へ行つてしまひました。それでも兄の胸の奥には、慈愛に充ちたお父さんの笑顔とお母さまの優さしいおもかげが、まだ消え残つた影のやうに、うすい幻になつて浮かんで居りましたが、弟はその懐かしい淡い幻さへ思ひ出すことができなませんでした。



二人は長い長い月日を、ある深い森の中に送つてをりました。雲の上までとどくかと思はれるやうな高い樹の根元には、緑色をした毛氈のやうな若草が、一面に生えてゐて、その中とところどころには、真白い花が星を散らしたやうに咲き匂つてをりました。

森に生れて、森の懐に育まれてきた哀れな孤兒の幼

い兄弟には、この森の中がほんとなつかしい棲家だつたのでございます。
春になりますと、青葉がくれの梢から鶯の優さしい小唄が、やはらかに流れてきて二人の寂しい胸を慰めてくれました。
『お母さまのお聲は、まるであの鶯の唄のやうにやさしいお聲でした。細いお唄のささやきが今でも私の耳の中には残つてゐます。』
物語りする兄の胸も、それに聞き入る幼い弟の胸も、ただなつかしさにみなぎつて双の臉から熱つい涙が、にちみ出しました。そして、二人は息を凝らして優さしい鶯の音律に聞き惚れるのでございました。
ひろい果てもない緑の平原には、消え残つた雪のやうに、まつしろい羊の群が、いかにも楽しさうに遊んで居ります。絹糸のやうなやはらかい牧草を食べて、日ましに大きく育つてゆく羊のあの温順しい眼がお父様の眼によく似てゐると聞かされた弟は、どんなに小さな瞳を輝かせて、喜んだこととせう。

「羊はきつと神様のお使ひで、お父さまやお母さまのおいでになるあの月の世界から来たものだ。」
二人はいつもさう考へて居りました。

香りの高い白い花が咲いては散り、散つては咲き、いく度か繰り返へされて、森の懐に抱かれて育てられて兄弟はだんだん大きくなつてまゐりました。

ある夜のこととございます。梢をとほして空の高い所に金の盆を浮かせたやうに澄みきつてゐるお月様を見ながら、静かに夢路を辿つてゐた二人のそばへ、大きな羊がまゐり



まして、

『あなたたちの、お父さまとお母さまは、白い鳩になつて遠い遠い森の中にゐます。そしていつでも二人のことを思ひつづけてゐるのです。早く行つてごらんなさい。あの遠い遠い森の中で、二羽の白い鳩はどんなにあなたたちを、まつてゐることでせう』。

と申します。

二人は、おどろいて眼をさまして見まはしましたが、もうさつきの羊の影も見えませんが。

『今のは、それではやつぱり夢か知ら？ たしかに羊が見えたのだが！』

兄が申しますと、弟も、

『いいえ。ゆめではありません。わたしにもよくあの聲が聞えたのですもの！』と申します。まつたく二人は、それを夢だと思ふわけには行きませんでした。そし

てこれはきつとあの羊が、ほんとおしへてくれたのにちがひないと考へました。『ほんとに、羊の言つたやうに、お父さまやお母さまは、白い鳩になつてゐるのか知ら？』

『でも、羊は神様のお使ひですから、きつと嘘ではないでせう』。

『けれど、遠い森つてどこか知ら！あの、毎朝お日様の出る方かも知れないね』。

『そして、夜になつて羊たちのかへる方かも知れませんか』。

『あの、きれいな流れの湧き出すお山かも知れない？』

二人は、羊の教へてくれた遠くの森のことを想ひつづけました。そして、そこになつかしいお父さまとお母さまが、白い鳩になつてゐると聞いては、ただもう、なつかしさとうれしさにをどる胸を抱えて夜の明けるのをまちもうけました。二人は朝のお日様が出たら、すぐその遠い森をたづねて出やうと考へました。

その次の朝になるのをまちかねて、二人は、すみなれた森をはなれて、あたらしい旅の路を、森から森へ野越え山越えて、さまよひつづけました。

いく日も歩きつづけて、名も知らぬ森から森へ、林から林へ細い小路を通つて、二人はいつかひろい野原のまん中に立つてゐました。野原の草の中には、ついぞ見たこともない珍づらしい花が咲いてをります。

「ほら、ごらん。こんなきれいな花が咲いてゐる。もうきつとあたらしい森が見えるでせう。」

兄はかう言つて、いかにも心細そさうな幼い弟をなぐさめながら、だんだんおしよせてくる紫の夜を見つめました。二人は手をひき合つて歩きつづけましたやがて、またあたらしい森の影が、うす黒ろく見えそめてまいりました。二人は喜びに、疲れもわすれて、走りまわりました。その森は今までの森よりもこんもりと繁つて、どこまでもつづいて見えました。丁度この時、玉のやうなお月様が空にのぼつ

てまゐりました。二人は小路のほとりにゐんで、静かに無言の祈禱を捧げるのでございしました。

その次の朝のこととてございします。にぎやかな小鳥の唄に、目をさまして見ますとまあ、どうでせう、二人の頭のすぐ上の小枝に二羽の白鳩が、いかにもうれしさうに、とびまはつてをるのではございせんか。

「あれ、あれ。白い鳩。白い鳩。」

二人は、餘りのうれしさにとびあがりました。まあこれがあの羊の教へてくれたお父さまとお母さまか知ら？二人は胸一ぱいのなつかしさに、われを忘れて、白い鳩を見あげました。二羽の白鳩は、いかにもうれしさうに「ポツポ、ポツポ」と、鳩の唄を唄ひつづけてゐます。

「ソラ、ごらん。白い鳩があんなによろこんでゐるでせう。これがきつとあの羊の

教へてくれたお父さまとお母さまの魂だよ。』

兄は弟の肩に手をかけて言ひました。見あげる二人の眼からは、熱い涙が止め度もなく流れて出ました。

二人はいつまでもいつまでも、その木の下をばなれませんでした。

それから、いく日か経つてから、この森の中には二羽の白い鳩と、赤い嘴をもつた二羽の可愛



らしい小鳥とがいつもいつしよに梢から梢へとびうつつてあそんでをりました。あはれな二人の幼い孤子の姿はそれきり見る事ができませんでした。(をばり)



廢坑

(私の古い思ひ出)

幾年ぶりかで、生れた故郷へかへつた私はなつかしい思ひ出にふけりながら、ほそい田舎道を歩いてゐました。田の畦にはもう青い草が生えそろつて、その中にはすみれがあちらこちらに咲いてゐます。橋の袂の椿の木には、もう色のうすくなつた赤い花が三つ四つのこつてゐます。私はその小橋を渡つて、とある小さな町へ歩いて行くのでした。

それは、町といつてもほんの小さな町で、ある高い山の麓にありました。そこに私の少年時代に通つてゐた小學校があるのです。そのころ、私は毎日々々二里に近かい山路を歩いてその小學校へ通つてゐました。

世間といふものを、ちつとも知らなかつた私の小さな頭には、學校があつたり、

郵便局があつたり、巡査さんの駐在所があつたり、その上温泉さへあるその町が、何だかたいへん賑やかな町に考へられました。

小學校と軒を並べて村役場がありました。その頃は玉木さんといふ老人な村長さんが居られて、天長節とか紀元節とかいふ時には、いつもこの人が来てはお話しました。けれどもその人の聲はあんまり小さくて、よく聞きとれませんでした。なんでも、いつでもいつでもおなじやうなことを聞かされたやうにおぼえてゐます。

その頃から、私の學校では養鶏や養兔をやつてゐました。二週間に一べん位の割合で、その當番がまはつてきました。さうすると、授業が終はつてから、一時間もこつてゐて食物をやつたり、汚物を掃除したりしなければなりません。

私は、いつもその當番の日が思はれてなりません。そんな事をするのが辛いといふよりも、むしろ家へかへる時間がおそくなるのが怖ろしかったです。冬の日の短い時などは、夜にならなければ家へ届かなかつたのです。さうした時に

私はよく獨りで、寂びしい山路をとぼく歩いて行きました。落葉のつもつた上を歩くとバサ／＼と淋びしい音がして何だか後から追つてくるやうな気がしてなりません。晝でさへうす暗らい杉林の中へくると、夢中にカバンを抱えたま



ま一散にとびとほつて、林を出てしまふと、やつと重い荷でも下ろした様に安心するのでした。

私は、いつか田圃みちを抜けて、白く塗られた二ばん目の橋のところへきてゐました。すぐ目の前の丘に、見覚えのある櫻の木が、立つてゐます。もうどの枝にも蕾が一ぱいについて、チラホラ二つ三つ開いたのさへありました。

『もう春だな。』

といふ感じがどこからともなく頭の中に湧き出てきます。私はなんともいへぬなつかしい気分です。橋を渡つて行きました。

私たちの教室のすぐわきの校庭にも五六本の大きな桜の木がありました。春になつて、やはらかい光線が教室の窓がらすを透はしてさしこむ頃になると美しく花が一ぱいに咲きました。目に見えないやうな春風が吹くと花がチラチラと、池の中や校庭に、白い衣を布きました。私たちはその花の吹雪をあびながら、鬼ごっこやかけっこをしてとびまはりました。私たちが精出して飼つた鶏は、美しい羽を光らせながら仲よく遊びました。

その桜は、いく度か咲いては散りました。そうして、私たちの卒業する時は、南の方へさし出た日あたりのよい枝だけが小さい蕾をもつてありました。その花が美し

く咲き出した頃はもう
私は故郷の田舎をは
なれてゐました。

白い橋を渡つた私は
いつの間にか道傍の廢
坑の前に立つてゐまし
た。その頃の鑛山は、
大へん榮えたもので、
ここらあたりの山の中



腹は、そこら中は坑道があつて、いつも坑夫が出たり人つたりしてゐたのでしたが、いつの間にかすつかり寂びれ果て、みすばらしい廢坑になつてゐます。その頃は

幼い私たちの眼を驚かすやうな大きな建物が棟をならべて建てられました。事務所
所の黒い塀は、どうやら形だけとどめてあるもの、屋根や壁はすつかりくづれて昔
の面影は見られません。私はその頃のこの鑛山の有様を思ひ浮べて、ぼんやりと立
ちどまりました。

この頃、この鑛山の事務所へは、洋服を着た人が多勢通つてゐました。学校の先
生と、お巡査さんより外に洋服などを着た人を見たことのない私たちは、その人
たちを、たいへん豪らい人だと思つてゐました。私たちが、學校へ行く頃ちやうど
その人たちも出勤してくるのでいつも途中で出遇ひました。その人たちの中に、た
つた一人私の記憶から消えることのできない人がありました。

その人は、その頃もう五十に近い人好きのする優さしい顔をした小磯さんといふ
人でした。途中の路で行き遇ふと、その人はいつもきまつてにこ／＼した優さしい
眼を私の方へ向けて、何か知らきつと言葉をかけてくれました。私は、何故この

人が私にばかり、そんなにやさしく言葉をかけてくれるのか知りませんでした。が、
それでも、そのことが何より嬉しいことでした。小磯さん。豪らい人。その人に言
葉をかけてもらふのが、幼い私には、どんなに誇りだつたか知れませんが。

まい朝、その人たちと行き遇ふころの所へ行くと私はきつとその期待に胸をわく
わくさせてゐました。そうして、黒い洋服を着て太い金鎖をさげた小磯さんを見
つけたときは、嬉しいやうな、耻づかしいやうな妙な心もちに襲はれるのでした。
けれ共、どうかして小磯さんと遇はない朝は、何だかひどく、失望して、一日中寂
びしいやうな氣持ちになつてゐました。

それは、なんでも夏ごろだつたとおぼえてゐます。私は養鶏の當番だつたので、
ほかの友だちとは一時間もおくれで、獨りで歸へつてきました。校門を出るころか
ら何だか怪しい黒雲が出てきて、今にも夕立がささうな天氣でした。雨よりも雷の

大嫌な私は、雷が鳴り出してはといふ怖ろしさに、夢中になつて急ぎました。事務所の黒ろい塀が見えるあたりへきた時に、ちやうど小磯さんが事務所から退けて歸へつて来るのに遇ひました。

小磯さんは、いつものやうにやさしく言葉をかけてくれました。それから黒雲が早足で飛んでゆく空を見上げて、

『こりやあぶない、降つてきますぞ！』

と笑ひながら、細くステッキ位に巻かれた絹張の洋傘を、無理に貸して下さいました。

私は早口でお禮をいつて、洋傘を大事さうに抱えながら、またひた走りに急ぎました。ちよつと後をふりかへつた時はもう小磯さんは曲り角を越して、見えなくなつてゐました。

けれども、その日はどうやら家に歸へるまで雨も降りませんでした。家の中へ



しえられて、いつもよりも早く家を出かけました。小磯さんは温泉に近いある旅館に下宿して居られたので、私はそこをおたづねして、父から言付けられた通りの御

入ると間もなく、篠つくやうな夕立がやつてまゐりました。私は子供心にも、その立派な洋傘を濡らさずにするだことを喜びました。

その翌る朝は、カラリとした晴天でしたので、私はよく御禮の言葉を父から

禮を述べました。その時小磯さんばまだ宿においでだつたので、すぐ出て來られていくらかのお菓子を、紙に包んで下さいました。

私は、その足ですぐ學校へ行きました。小磯さんから戴いたお菓子は、そつと、カバンの隅へ忍ばせておいたのですが、それを先生に見つけられまいと一日中、小さい胸をいためました。

それらも、今になつては、なつかしい忘れることのできない幻です。

なつかしい優さしい小磯さん。私は心の内で、微かに呼んでみました。けれ共、もうその人もここには居なくなつてゐます。

私は、優さしい小磯さんの面影を心の中に描いて見て、無性に悲しい氣分に襲はれました。のんびりとした春の田舎道を歩きながらも、私の心は小磯さんの上ばかりに馳せてゐて、餘りに早く町の入口に架つてゐる釣橋に來たことに驚きました。

静かに揺れる釣橋を渡つて、町へ入つた私の眼には、すぐ小學校の高い屋根と校庭の櫻の木がうつりました。

私は、懐かしい心に誘はれてその方へと、歩いて行くのでした。(をばり)

夢の御國

戸村都無



澄雄さんは、此世の中にたった一人の姉さんを持つて居ました。それが澄雄さん
に取つては何よりの力であつたのです。いたづらツ子の澄雄さんは何時もくお父
さんやお母さんからお小言を云はれます。其時は喧嘩の大將の澄雄さんも裏の垣根

夢の御國



の側に行つて泣くのが常でした。此んなにして泣いてる澄雄さんの所へは、お父さんもお母さんも見舞つては呉れないので、何んだか澄雄さんは一層悲しくなり出して、しまひには大きな聲を張りあげて、泣いて了ふのです。ボチの奴までが馬鹿にした様な顔附きで圓いお眼めをバチクリバチクリとやつてます。

「打遣つておゝき!!放つておゝきよ。」

て云ふお母さんの聲が柿の木の間から聞えて来る時、澄雄さんは始めて安心して、まあ好かつたと思ふのです。何故かと云ふと、それはお仕事から歸つて来た姉さんが、自分を慰めに來て呉れるのだなあと云ふ事が判つたからです。するとほんとうにお庭を石疊の上を歩いて来る姉さんの懐かしい足音が聞へて来るのです。澄雄さんはお顔にあてゝ居る手の指の間からソツト見ると、赤い帯を締めて大きな束髪に結ふた姉さんが、美しい懐しい顔を笑せ乍ら、こちらに歩いて來ます。澄雄さんは此うなると、何時もく同じ様に、さもく悲しそうに急に聲を高くオーンオン



オンとしやくり上げるのです。すると姉さんが暖い胸の上へ澄雄さんの頭を抱き乍ら袂から紙を出して、鼻汁と唾と涙とで汚い澄雄さんの顔を掃き乍ら優しい聲で、

「何うしたの？又たおいたしたのでしよう……そうでしよう。」

とおつしやるんです、すると澄雄さんは悲しくて口がきけないかの様にウ、ンウウンと云ふて姉さんの胸の上でおつむりを振るんです。『それぢや喧嘩？そうでしょう……だから姉さんの歸るまで、お家で遊んでおいでつて云ふてるのに……それでお父さんやお母さんに叱かられたんでしよう。』

こう姉さんから當てられて了ふと、澄雄さんは今度はず、ンも云はなければ頭も振らないで、木像の様に黙つて了ふのです、姉さんは澄雄さんの汚いお顔を清れいに掃いて了ふと、

『さあお家にお歸り、私がお父さんやお母さんにお詫を云ふて上げるから。』

と云ふて無理に引張つて行くのです、此うなると澄雄さんは、もう悲しくも何んともなくなつて了つて、歸りには檐の下に尾を振りながら、こつちを見てるボチの足を、姉さんに見られない様にして一寸踏んでやつたりしながら、お家へ入るのです而してお父さんやお母さんの所へ行つて姉さんが、

『もう此から喧嘩はしませんから、御許し下さい。』

つて言ふと澄雄さんは姉さんのお尻の所で、小さくなつて頭を下げるのです。謝ればもう決してお父さんもお母さんもお小言はおつしやいませんでした。其から姉さんとカナリヤに餌をやるんです。姉さんが籠のお掃除をして居る中に、澄雄さんは

臺所から稗を持つて来るんです。而して餌を入れて籠を元の所へ吊るしてやると、カナリヤは愛嬌よくチチチツと高く啼いて、姉さんと澄雄さんとを、可愛い、お眼めで見下してます。而して時々小さなお胸をさも〜何か考へでもするかの様に、右の方や左の方へ屈げたりするのを姉さんと澄雄さんは、手を握りながら見てるんです。夜になると姉さんが、お仕事を出すと、澄雄さんは讀方のお稽古を始めます。そしてお稽古を済ますと、お伽噺の御本を姉さんに讀んで聞かせて上げるのです。其の中に澄雄さんのお眼めが、段々細くなつて、時々頭が、コックリ〜と、お舟を漕ぐ時分に、澄雄さんは姉さんと枕を并べて、暖い姉さんにだつこして、朝迄でグークツと寝んねして了ひます。朝澄雄さんが學校へ行く時は必つと姉さんは、御門の所まで送つて出て、澄雄さんが煙草屋の所を學校の方へ右に曲るまで、立つて見て居ます。だから澄雄さんは、學校の誰れよりも、隣の健ちゃんや、お向の竹ちゃんよりも、一番好きな〜人は、姉さんだつたのです。其れに姉さんは澄雄さんの

好きな御菓子やおかすを知つて居て、買つて来て呉れたり、こしらへて下さつたりするんですもの。

仲の好いので、何時も此事だけは、お父さんやお母さんや、時々来る叔母さんやに、ほめて戴くんです。姉さんが時々お母さんの御用事か何かで、夜まで歸らなかつたりする時は、澄雄さんは其れは元氣が無いのです。こんなには姉弟二人は仲好く暮らして居たんです。——毎日……所が、或る時の事、例の通り澄雄さんは、學校へ行つて、土曜日なので、お晝限りで歸りました。其の日はもつとも朝から冷たい嫌な風が吹いて、空は一面ねすみ色に曇つてお天陽様は一度もお顔を見せませんでした。

「オヤツ!! やつぱり今朝お母さんが言ふた通りだ、云ふ事を聞いて、傘を持つて来れば好かつたなあ。」

澄雄さんは今朝お母さんが、傘を持つてお出でとおつしやつた事を思ひ出しまし

た。然し幾ら後から考へても駄目です。雨は段々烈しくつて来ます。でもお母さんか姉さんか傘を持つて来て下さるだらうと思ふて、シヨボ〜降る雨をさけて下駄箱の隅の方に小さくなつてました。けれど何時迄待つても〜、誰れも持つて来ては呉れないんです。澄雄さんは少し怒り氣味になつて、袴を高く、はしよつて、雨の中をスタコラ〜お家へ歸りました。而してお家の格子を開けて、一ツ嘸鳴つてやらうと思ふて先づ、「只今ツ」……少し泣き聲で嘸鳴りました。すると誰も返事をしないのです。變だなあとと思ふて、もう一度此度は大きく、「只今ツ」……やつぱり静です。是は變だぞ……臺所から足を洗つて、上つて見ると、お父さんもお母さんも、姉さんの室に集つてる様です。何んだらう……窺いに見ると愕いたの愕かないのつて、あの元氣の好かつた姉さんが、頭の上に氷を載せてウウン〜つて呻吟てるではありませんか、澄雄さんは、もうびつくりして了つて、おど〜聲で「お母さん、姉さん何うしたのです、急に御病氣になつたのですか。」

するとお母さんは、おちつきを失つて、
 『さつき、御仕事から寒気がするつて歸つて自分で寝たの、すると、大變な熱が出
 て、お医者様に見てもらつたら、ほらちか頃流行つてる悪い風邪らしいつて云ふの
 ……』
 お母さんはもう此時は涙聲です。澄雄さんは大丈夫だ、姉さんの所へ病氣なぞ來や
 がつたら、僕が退治てやらあ…大丈夫〜と思ふてましたが、肝心の姉さんは、
 澄雄さんが何を云ふても返事する事が出来ない程苦しがつてるんです。——何うし
 て姉さんは此んなに苦しがつてるんだらう、姉さんなんか悪い事をした事が無いの
 に…神様!! 佛様!! 何うか姉さんの御病氣をなほして上げて下さい——澄雄さ
 んは一生懸命になつて御祈りしました。だけど姉さんは日に〜悪くなる一方です
 而して其れから三日の後に、あの優しい美しかつた姉さんは氣狂ひになる程悲しが
 つてる、澄雄さんやお父さんや、お母さんを殘して、到頭死んで了つたのです。澄

雄さんは此時は天と地がひつくり返つた様な氣がして
 眩暈がして、後はまるで判りませんでした。お父さん
 もお母さんも、冷たくなつた姉さんの布団の上へ泣き
 崩れてます。お庭のカナリヤまでがもう御世話して下
 さる人が居ないので、悲しさうにチチチツと二聲三聲
 鳴きました。ポチやもぼんやりして居ます。

日が経てば經つ程姉さんが慕はしくて、夕方なぞ邊
 りが静になつて遠くの方から豆腐屋や歸つて行く飴屋
 の哀れつばい聲が、畑や田甫を傳つて聞へて來ます。
 此んな時は澄雄さんはもう溜らなくなつて——姉さん
 姉さん——と廣い野原や高い空に向つて、呼んで見る



のです。だけどあの懐しい姉さんは決して歸つては來ませんでした。澄雄さんは段段元氣が無くなつて、此頃はおい／＼瘦せて來て、其れは恰度虫喰ふた木の葉が追い／＼赤く枯れて行く様にです……學校から歸つて姉さんの居ない、冷い淋しい窓の所で、讀方のお稽古をして居ますと健ちゃんや竹ちゃんや誘ひに來て呉れますが澄雄さんは何時も／＼お斷りをして、姉さんの事をちつと考へてゐるのです。お伽噺の本も聞く人が無いので、もう讀む氣にはなれません。だけど一つ澄雄さんに心頼みになる事があつたのです。其は太陽が一日の仕事を済まして西の空へお歸りになる時、あの鎮守の杜の向ふにオレンジ色に輝くべールに包まれて、綿の様な雲に蓋はれて、紫の雲に色彩られて……靜に／＼沈んで行く時なのです。何時も其時紫の雲の中に尊い慈深い佛様と其の直ぐ側に、ほんとに鮮やかに、はつきりと姉さんの顔を見るのです。

「オヤ!! 姉さんが! 姉さんが、あら!! 姉さんは佛様の所に居るんだね——佛様!! あ

なたは何故私の大事なく、姉さんをさらつて、其んな遠くに連れて行つたのです。私は姉さんが居なければ生きてゐる氣がしないのです、姉さんを私に返して下さい、私に返して下さい。」

斯う云ふて美しい麗はしい夕陽に叫ぶのです。其れからもう一度姉さんを見る事が出来る、と云ふのは、太陽の光りが全く消て、蒼く暗い大きな空にキラ／＼輝いてる幾つものお星様の真中に青白く光つて靜に漂ふてるお月様の中にも、姉さんの懐かしい優さしい顔は窺へるのでした。澄雄さんに取つて、おてんきの日程慰めはなかつたのです。或夜の事澄雄さんは例の通りブラ／＼と家を飛び出しました。外はやつぱり好い月夜で、お月様はお山の松の枝の間から圓く白く光つて見へました。

「オーあのお月様の隅の方に黒く姉さんの影が見へる、あの今夜は姉さんは悲しうに、暗い岩の上で泣いてるね——姉さん、何か悲しい事があるの? 僕に話して下さいよ……姉さん、姉さん。」

澄雄さんは夢中になつて、何時の間にか山の奥深く入つてしまいました。おやつと澄雄さんが思ふた時には、澄雄さんの體は丈よりも高い薄や雑草で埋もれて居ました。邊りは大きな樹が、魔物の様に突立つて、其れに枝が一面に生茂つて、空は全く見えないのでした。けれど重なり合ふた樹の葉の間から、お月様の光りがかすかに洩れて、下の葉末の露に光つてます。コーロギや種々の虫が静かな山奥で、勢よく鳴いて居ます。

「アー僕何う仕様」。お家は何つちの方だろう、何も見へやしないや、恐ろしい獣物でも出やしないだらうか、魔物でも出やしないだらうか……姉さん、姉さん。」

暫くすると、向ふの大きな樹の後から真白い長い布を着た髪の長い一人のお爺さんがスウーッと現れて來ました。而して澄雄さんの所へ來て、

「お前はそんなに姉さんに會いたいかい。」

と尋ねるので、澄雄さんは恐ろしい氣味の悪い人だとは思ひましたが、亦何んと



なく懐かしい様な、神様の使の仕である様に思ひますので、

「若しあなたに出来るんなら、姉さんの居る所に私を連れて行つて下さい、私は何

んな苦しい事でも我慢しますから。』
 と答へました。すると其不思議な人は、『私に従て来い』と云ひながら、後は黙つて歩き出しましたので、澄雄さんは一生懸命に其後へ従いて行きました。其れから餘程歩いて何んでも大きな山や河を越へて、體が疲れ果て、了ふた時分直ぐ向ふに立派な御殿が見へ出しました。お屋根は金色に光つてます。

『お髯のお爺さん一體此處は何んと云ふ所なのです。』
 とさうすると、お髯のお爺さんは重々しい聲で、

『此は極樂と云ふ所なのだ。お前が餘り姉さんに會ひたがつてるから、俺が迎ひに行つて上げたのさ、此れを眞すぐに行くと花園がある、其はランピニ園と云ふのだ。其處へ行くとお前の姉さんは、佛様のお膝に抱かれて、楽しく眠つてるよ。』
 そう言ふたかと思ふと、不思議ではありませんか、お髯の爺さんは煙の様に消て了ひました。

『お髯のお爺さん、もつと好く教へて……』

と叫びましたが、もうお髯のお爺さんの影も形も見へません。獨ぼつちになつて澄雄さんは何んだか氣味悪く、淋しくなり出しましたが、嘘か眞實か姉さんに會へると云はれたので一生懸命教へられた儘其ランピニ園へと急ぎました。彌よ／＼ランピニ園に這りますと、いきなり何んとも云はれない好い香りが軽く流れて來ました。其れから花園には紅や紫や黄や白やの、それは／＼美しい花が笑ひ崩れる様に愛嬌を湛へて居ます。赤い鳥や鶉色の蝶が花から花へ好い聲で歌を歌ひ乍ら舞つてます。其れからおいしそうな苺や梨や桃や種々な果物が枝か折れそうに實つてます。其下には藤紫の草原が夢の様に展つてます。澄雄は自分を忘れて、ウツラ／＼景色の中を徨ひました。暫くすると、青い雲の幕がキラ／＼と眼の前に光りました。——此れがほんとに佛様の國と人間の國との境目なそうです——此の雲から向ふに在るものは、一つとして人間の世界の物の様に壊れたり亡びたり枯れたりするもの

はありません。皆な佛様と同じ様に永い／＼昔から永い／＼昔に生きて行くと云ふものばかりなのです。其處に有る樹の葉は皆んな金なのです。昔しから未だ枯れた事が無く、其の枝から枝へ飛び廻つてゐる紅玉色の小鳥も、古い／＼昔から此の園に遊んで居るのです。

「此れが佛様の國と云ふ所か、まあ何んて云ふ好い所なのだらう。」

澄雄さんは歩くのも何も忘れて了ふて、手をぶらりと下げた儘唯だ夢見てる人の様にうつとりとして居りました。

澄雄さんが、此處に斯うやつて何時迄で立つて居ても威しを云ふたり、いちめたりする、悪い悪魔の様な者は居りません。一體此處に居る誰れもは善い事だの悪い事だのと云ふ事を知らないんです。澄雄さんが歩き出さうとした時でした、何方からとも無く、何んとも云ひ様の無い涼しい軽い音楽が響いて來ました。

「アラまあ何んと云ふ好い音だらう。」

其れは澄雄さんが今迄で聞いた事の無い音楽でした。すると空の方からきれいな花が、雪の様にチラ／＼降つて來ました。

「オヤまあ不思議だ。アツ紫の雲が降りて來たッ、何んて云ふ懐かしい雲なのだらう。あの輝く夕陽の時、姉さんの居たのはあの雲だつた。オー眩い、何んの光りだらう、お天陽様の光りとも異ふ様だ、あー僕の體までが、此んなに立派に見へる。」まもなくゆかしい尊い佛様が、天の方から其の紫の雲に包まれて麗はしい光りを放ち乍ら、静に／＼降りておいでになりました。澄雄さんは一生懸命に見よう／＼と焦つても、自然と頭が下へおりて了ふんです。

——佛様!! 僕の姉さんを——と云はうと思つても、口がこわ張つて云へる所ではありません。すると佛様は澄雄の焦つてる姿を慈深そうに御覽になつて、

「これ澄雄よ、お前の姉さんは、私しが大事に守つてるから安心なさい、人間の世界ではお前の姉さんばかりではない、何んな大事なものでも悉く亡び行くものだ。」

此は佛以外の凡ての物が脱れる事の出来ない運命で、弱い所で同時に強い所なのだ。だから人間が死ぬ事を呪ふのは人間として愚かな事なのだ。お前は姉さんが懐しいと思ふたら、姉さんの爲め、御祈りなさい、佛を怨んだり、死を呪ふたりする事は悪い事です。此を御覽。お前の姉さんは今此處にこんなに安らかに、樂しげに眠つてゐるぢやないか。」

ハット思ふて澄雄が頭を上げて、まともに見ると、ほんとです、ほんとうにです。死んだあの美しい懐しい姉さんは佛様の膝の上に、やつぱり紫の雲に包まれ乍らさも心持好さそうに眠つて居るのです。

「姉さん、姉さん、私しです、澄雄です。姉さん言を掛けて下さい、貴女はほんとに、そんなに樂いんでんか、私は毎日、貴女の事ばかり心配して居たのです。姉さん何うして眠つてばかり居るんです。はるく、私は會ひに来たんです。姉さん、姉さん。」

澄雄さんはもう夢中になつてつか／＼と前へ出て、姉さんの房々した髪に手を解れようとした時、何んとも知れない大きな物音に愕かされました。ハット思ふて振り返つて見ますと、今迄で眼の前に光り輝いて居た、佛様の光りも美しい紫の雲も涼しいあの音も赤い鳥も白い花も悉くが、嘘の様に消て無いのです。而して凄じい程静な深い草の上にもものすごい月が木の間から洩れて輝いてます。

「オヤ!!おや／＼今のは、ありや何うしたのだ。夢かしら。いや／＼僕はほんとに佛様と姉さんを見たんのだ。」

澄雄さんは自分で自分の體中をさわつたり突いたりして見ました。體は露でびつしよりです。

「そうかな……夢かなあ……早く家へ歸らう……」

深い叢から、外へ出ました。小さな星が幾つもの淋しくまたゝいてます。「そうぞ、さつき佛様が人間の世界の何んでも皆んな亡びるんだ。姉さんは僕か思

ふた程悲しがつては居ない。却つて楽しそうだ……其んな事を考へるよりは御祈りをしろつて、そうだ、早く家へ歸つて御祈りをしよう。』

亦大きな音が頭の上でしました。見ると大きな鳥が飛び出す所でした。澄雄さんの顔は何時になく輝いて見へました、而して元氣好くお家へ歸つて行きました。

(をばり)



大か太郎

戸村都無

太郎は或國の貧乏な家に育ちました。其は恰度太郎が十歳になつた春の事でした。何處の山も野も、其れは、美しい花が咲き亂れて居て、大人も小供も小雀の様に、花から花へ遊び廻つて楽しんで居た時に、太郎の家だけに悲しい淋しい運命が訪れて來ました。と云ふのは、優しい元氣の好い、太郎に取つて大事なく、お父さんが、一寸した風邪がもとで到頭亡くなつてしまつたのです。其れでなくても弱い太郎は、何んなに泣いたでせう、何時も近所の小供から虐められてる太郎に取つて、お父さんは唯だ一人の力強い懐かしい味方だつたのです。お父さんを失つた太郎は、澤山のお友達から仲間はずれにされました。皆んなお友達が櫻の木の下で陣取をして、楽しそうに遊んで居る時

大か太郎

四三

も、太郎だけは自分の家の暗い窓から怨めしそうに眺めて居るのでした。斯ういふ時太郎の頬には、何時の間にか熱い涙が流れて居ました。

「お父さんが死ななければ好かつたなあ。僕は何うして力が弱いのだろう。松ちゃんは何んだつて僕だけをいぢめるのだろう。僕は角力をしてでも喧嘩をしても泣かされてばかり居るんだ。何うにかして力が強くなりたいものだ、そうしてあの憎い松ちゃん達を、あべこべに泣かしてやりたいなあ……」

太郎は學校から歸つてお稽古がすむと、何時も此んな事を考へて居るのでした。けれど運命は、太郎にもつと悪い事を降らしました。お父さんを失つた太郎の家は、何時までもその大きなお庭を持つた立派なお家に住んで居る事を許しませんでした。まもなく太郎はたつた一人のお母さんと、小さい汚いお家に住まなければならなくなつたのです。優しいお母さんは、何時も太郎のお頭をなせながら、

「何も知らないお前に、苦勢をかけてすまないねえ。」



と仰言るのです。太郎は斯う云はれると何んだか悲しくなつて、お母さんと二人で

泣き崩れて了ふのが常でした。お父さんの室を飾つて居たあの金の屏風も、お母さんの大事にして居た桐の簞笥も、今日は無いのです。太郎は寝たり起きたり勉強する室のお疊は破れて居ます、障子は煤けて、何んな好い天氣の日でも、心持の好い太陽は、太郎の室を照

のです。斯うした中で唯だ變らない事と云ふたら竈の前に氣樂そうに寝んねしてるタマヤと太郎が毎朝鞆を下げて、學校へ行く事だけでした。太郎は角力や喧嘩ちや弱虫だったか、學校では何時も一番級長でした。お家が貧乏で時々御飯を食へない時があつても、太郎は學校を休んだ事は無かつたのです。學期の終ひになつて通申薄を渡される時は、虐つ子の松吉や健治は流石に悄れて歸ります。と云ふのは、乙は體操と國語だけで後は兵隊さんの行列なのです。斯うゆう時は皆んな太郎を羨めしそうに見るんです。その譯です、太郎は全甲なんです。太郎は得意になつて急いでお母さんにおめにかけます。お母さんは太郎の手を取つて泣いてお喜びになります。而してお母さんは、

「一生懸命に勉強して偉い者になつてお呉れ……」

幾度もくく仰言ひます。太郎は人が何んて云つても、一生懸命に勉強仕様と此時強く心に誓ふのです。こんなに太郎は一心不乱に勉強をやりましたし、亦た學校が

何により好きでした。——だけど此太郎が、急に學校が嫌になつたのは、此れから一ヶ月と経たない中の事でありました。御本とお辨當とを鞆に入れて、お家を出た太郎は學校への道と反對にきれいな草のある野原や美しい花の咲く山やに行くのでした。而して眞赤な太陽がお山の向ふに消へて行く時分太郎はぼんやり山道をお家の方へ歸つて行くのです。此學期の太郎の通申簿は、甲が三つに後は乙と丙とでした。何んにも知らないお母さんは、何んかに驚いたでしやう。何んかに悲んだでしやう。聲も出ない位お母さんはお怒りになりました。お母さんの眼には涙が光つてます。お母さんの聲は戦へてます。お母さんの胸は烈しく鳴つて居ます。だけどお母さんは割合に落着いて、次の事を云ひました。

「ねー、太郎、人と云ふものは何んかに貧乏して居ても何んかに苦しい思をして居ても、何んなに人から虐められて居ても佛様や神様は常にくく慈深い眼を以つて御覧になつて居ます。一生懸命に努める者には、必つと最後の勝利をお下しなされるの

のです。「勉強は幸福の母」と云ふではありませんか。お父さんは死なれる時、何んなにお前を御心配になつたらう。お母さんの細腕ではお前を樂に他の子供の様に、勉強させる事は出来ません。だけどお母さんは、お前を立派な人にさせたいと思ふ心は何このお母さんよりもつと〜強いのです。太郎!!お母さんの心を察してお呉れ、夢にも怠心を出すなんて云ふ事は空恐ろしい事です。死んだお父さんやたつた一人の此のお母さんの爲に、勵んでお呉れ。ねー太郎……」

お母さんは涙ながらにお訓へになりました。

「判りました。お母さんに御心配をかけて、すみません……だけど……だけど……残念です。」

太郎は咽の所で聲がつまつて、後は泣き聲に消されて終ひました。——次の日から亦太郎は嫌な學校へ出掛けました——しよんぼりと……

「アア、學校へ行くと復皆んなから馬鹿にされるのか。貧乏人の子ヤイと、馬鹿

にされるのは忍びもする。松吉健治から握られる位は我慢もする。然し〜澤山の子から親無つ子ヤイ……ウム實に残念だ……俺は何うして力が弱いのだ。」

斯う云はれた時太郎は自分を忘れて、しがみ附いて行くのです。けど、味方の無い太郎は、五六人の虐つ子の爲に、散々に握り倒されてしまいます。(オーオ惨めに) 此時太郎の眼は怒に燃た事でしょう。

「お父さん!! お父さん!! あなたは何故私の様な弱い子供を一人残して、死なれたのです。僕は段念で〜堪りません。」

誰れも居ない運動場の隅で、しよんぼりと太郎は心ゆくまで泣いて居るのです。斯うしてる所を、意地悪つ子の一人に見附つたら最後太郎は多勢の子供から罵言されるのです。憎たらしい松吉が、

「おーい、武ちやんも健ちやんも太郎の側に寄るな、嗅いぞ、何うだい太郎、お前の袴は破れてるではないか。買へないのかい。やい乞食太郎何故黙つてるのだ、腹

が滅つて口がきけないのか。』

澤山の子供は誰れ一人太郎の味方になつて、不幸な太郎を慰める者は無いんです。斯うして毎日、虐められて居る太郎の心は、妙にひねくれて行きました。太郎は毎日學校の歸りに此んな事を考へ乍ら歩くのが常となりました。

『何うしても人間は、力が強くなつてはいけない、金よりも學問よりも、力が大切だ。力さへあれば、學問ある人も金を持つてる奴も擲り倒す事が出来る。俺は何うにかして其の力が欲しい、而して俺を長く、間日に、虐めてた金持の子供や、弱い者虐めの松吉などを、うんと、散々に搦つて、搦り倒してやりたいものだ。』
可哀そうな太郎は、毎日學校の歸り途、お寺の山門の仁王様にお願ひして、

『何うか私を日本第一の力持にして下さい、私一生のお願ひであります。』

夢中になつて御祈りをしました蜘蛛の巣の張つて煤けた網の中の眞暗の中から、仁王様は大きなお眼めを、恐ろしい程輝かして居ます。

『仁王様 私は何もいきりません。力を興へて下さい。私は日本第一の力持になりましたのです。而して私を虐めてた憎らしい奴等を、うんといぢめてやりたいのです。仁王様 嗚ぞあなたも私の悲しかった事を御存じでしょう。私は力さへあれば、力さへあれば……』

太郎は雨の日も風の夜も仁王様に御願する事を忘れた事はありません。

其れから恰度三十日経つた或る晩の事です。何時もの通り太郎は、お母さんの側で寝んねして居ました。夜中の十二時頃大きな聲で、『太郎ッ』『太郎ッ』つて云ふ聲が聞へます。愕つくりして太郎はカッと眼を開いて見ますと、ついさつき御詣りして来たばかりの仁王様が、天井につかいる様に立つて居ます。

『オヤッ!! 仁王様ッ!!』

太郎は蒲團からがばつと突立ちました、仁王様は眞赤な太い腕と臍とを、ひき出して、何時もの通りお眼めをヒカヒカ光らして、左の手に何か玉を握つてます。仁

王様は破れる様な聲を張り上げて、

「太郎!! お前は其んなに力が欲しいか、お前は必つと後悔する事はないか。」

「エーエ、私は何もいりません。世の中に力さへあれば私は満足です。力を得たら私は何んなに喜んでしよう、私は今まで私を虐めてた奴等を片つ端から擲り倒します、あいつ等のお家も、あいつらの持つてる何んでもぶち壊して了います。えーえ後悔などは致しません。どうか其奇力を下さい。お願であります。」

「そんなに云ふのなら力をやろう後悔するな、お前は人間としてもつとく大切なものを忘れて居る、何うしても力が欲しいか。」

「其の通りです、私は力より外に何物も認めません。」

「それでは、此を與へよう。お前は此から日本第一の力持になるであろう。」

仁王様は左の手にお持ちになつてた力の玉を太郎にお渡しになりました。太郎は飛び立つ様に喜んで其玉を受け取りました。

「あゝ、嬉しい〜。」

太郎は何うして好いか判りませんでした。急に世界が明るくなつて、初めて春のうららかな太陽を受けて笑ひ出した花を見てる様でした。胸が嬉れしさにワクワクと躍りました。

「太郎何うしたの……太郎!!」

お母さんは太郎をゆり起しました。

「えつ……あつ……今のは夢か、然し確かに力は貰つた。」

「太郎なに。」

「えー夢の事です。」

明る朝起きて見ると、腕が大きく節くれだらけになつてます。

「夢ぢやない。ほんとうだ。」

太郎は嬉しくて、早速試めしたくて堪りません。一寸見ると隣りのお庭の隅に、

かなり大きな椎の木がありました。太郎のお家の方へ、其の太い枝が延て居ました。太郎は其枝に手を掛るや否や、ウツんと一つふんばると、さしもに太い椎の木の枝はマツチの棒の様にボツキンと折れて了いました。太郎はもう嬉しくてくゞ堪りません。其と反対の方にもつと太い枝がありました。太郎はえいつと拳固で振り付けますと、電信柱の様な頑丈な枝は脆くもメリ／＼つと折れて、地面に落ちて来ました。

此時太郎の眼は喜びに輝きました。力の籠つた腕は唸つて居ます。太郎は雲に乗つて、天國に行つた様な氣になつて、暫くぼんやりして居ました。

「よしッ、あの松吉奴、健治奴、よくも／＼今まで俺を虐めやがつたなあ。もう大丈夫だ、何人でも来い。」

其朝は何時もより早く早く學校へ行きました。門は未だ閉つて居て、誰も来て居ません。太郎の腕は力が溢れる様に鳴つて居ますし、心は長い間の怨と怒とに戦へて居

ます。太郎は筋ばつた拳固を振り乍ら、松吉の家の二三町手前の露路まで来ました。其時十間程前に太郎は、松吉と健治と武雄と八九人の子供が来るのを見附けました。「来たなあッ、お、二年も三年も長い／＼間の怨を晴す時が来た。仁王様、あなたの恩に酬ゆる時が来ました。」

太郎の腕は一層に戦へました。松吉等は何んにも知りません。大きな聲で話し乍ら段々太郎に近いて来ます。太郎の方から大聲で呼びかけました。

「やい、松公!! 健治!!」

「なにッ、なんだい弱虫太郎か。」

松吉が云ひました。

「貧乏人の乞食太郎か。」

健治が云ひました。

「親無しッ子か。」

武雄が云ひました。此の聲が終るか終らない中に、太郎は燕の様に三人の方に飛んで行きました。驚いてる三人の頭を、物をも云はず片端から、松の木の瘤の様な拳固で、コツリ／＼と振り付けました。一番先に振られた松吉の頭は搗きたての餅の様に、ブーツと大きな瘤が出来て了いました。

「あいたツ、やツ、俺の頭が二ツになつちやつた、アーンアーン／＼。」

何時も餓鬼大将の松吉は、大きな聲で泣き出して了いました。隣に居た健治は、びしやりと横面を握られました。

「あいたツ」と叫んだ健治の頬べたは、横の方へ引ん曲つて耳が面の真中に來て、眼や鼻やお口は、後の方へお宿換へをしてすました。其次に振り倒された武雄は飛行機の様に、向ふの家の塀を突き破つて、お庭の中へ轉げ入りました。此様を見た後の子供は、とツ／＼／＼全速力で逃げて了いました。其の後姿を見送つた太郎は、涙の出る様な嬉しさが有りました。松吉も健治も武雄も動けなくて呻つて居

ます。太郎は其側に行つて、

「やい、松公、健治、よくも長い間俺を虐めやがつたな、成程俺は貧乏人の子で、お前達は金持の子だ。俺は力が無い爲に何年となく、お前達から泣かされて來た。俺は勉強と眞面目とでは、お前達に負けた事は無かつた。然しお前達や世間の奴等が餘り馬鹿にするので、俺は取返へしの付かない悪い人間になつて了つた。お前達が斯んな目に會ふのも結局お前達が勝手に招いた事だ、おい、もつと握つてやらうか。」

「もう堪忍して呉れ、眼が廻ひそうだ。」

松吉が云ひました。

「俺は眼が見へなくなつた。」

健治が云ひました。

「アハツハツ／＼／＼。」

太郎は大きく笑つて續けました。

「俺は世の中に力が何により大切だと思ふ様になつた。學問もいらぬ。情も知らぬ。唯だ力が強くなつて、俺をいぢめた世間の奴等を、うんと懲らしめてやりたなのだ。金が有るからつて、力が少し有るからつて目茶苦茶に弱い者いぢめするものぢやないやい。おい昨日迄の太郎とは異うんだ。金は無いが、力だけは、持つてるのだ。俺は此れから俺を苦しめた世間の奴等を虐め返へしてやらうと思ふて居るのだ。」

太郎は斯う云ふて悠々と歩いて行きました。其れから太郎は村中をあばれ廻りました。家を壊したり、子供を泣かせたり、もうお母さんの云ふ事も誰れの云ふ事もきかなくなりました。恰度惡魔の様に悪い、情知らずの人間になつて了つちやつたのでした。其の時分から誰云ふとなく、大力太郎くと云ふ様になりました。

大力太郎は國の王様さへもてあます様になりました。或日大力太郎は隣村まで暴

れに行かうと、お山の奥深く這入つて行きました。道に迷ふたものやら、三十里も歩きました。村らしい所へは行きませんでした。其に太郎は疲れて来たものですから側にあつた石に腰かけて休んで居ますと、向ふの雑木林の中から、真白な衣と鬚とを持つたお爺さんが、細い杖を突いて、ひよろく出て参りました。

「おやツ、變な奴が来たぞ。」

と太郎が思ふて居ますと、其お爺さんは、段々近寄つて来ました。すると太郎の側に來て、



「子供よ、子供よ、お前はこれから何處に、何しに行くのだ。」
と斯う尋ねるので、太郎は變なお爺さんだと思ふたので、

「お爺さんこそ、何をしに行くのです。」

とあべこべにききますと、お爺さんは、しわだらけの氣味の悪い顔を笑ひ乍ら、

「俺か、俺は遠い／＼際涯の無い、遠い所から来たのだ。」

「随分遠い所から来たのですねえ、而して一體其んな所から何にしに来たのですか。」

するとお爺さんは、

「俺は、佛様の使に來たのさ。人間が一日でも無くてならないもので、而も忘れて居るものがあるので、其れを教へに來たのだ。」

「へい、人間に無くてならないもんで、而も忘れてるもんですつて、其は一體何んだらう。」

肩をいからして、太郎は尋ねました。

「當て、御覽。」

お爺さんは優さしく云ひました。

「そう、人間に無くてならないもの……と……あつ判つた。」

「何んだい。」

「麵麩でしょう、そうでしょう。」

「ウフ……フン……ちがう。」

「えッ、ちがう……其れぢやなんだらう、玩具でもなしと……ウム……判つた、そ
うだ。力だ!! 力にちがひない、そうでしょう。」

太郎は得意さうに申しました。

「力ッ……其れでも無い。」

お爺さんは少し前へ出て申しました、すると太郎は次の事をお爺さんに尋ねまし

た。
「力ちからでなくて人間にんげんに無なくてならないものつてありやしない、お爺ぢいさん、それではあなたの大切たいせつなものと仰おつしや言いるのは一體いったい何なにんです。」

「それは佛ほとけ様さまさ。」

お爺ぢいさんは静しずかに判はつきり云いひ切りました。

「何なにんだい、其それが其そのの大たい切せつなものなのですか、僕ぼくは力ちから以外いぐわいの何なにものも認まめて居ゐません。力ちからさへあれば、金かね持もちも學がく問もんある者ものも、犬いぬころの様ように掘ほりつける事ことが出来できますよ、佛ほとけ様さまだつて、僕ぼくの此この拳けん固こに適かなうものか。力ちからです、力ちからです。」

するとお爺ぢいさんは、つか／＼と前まへへ進すすんで、少すこし大おほきな聲こゑで、

「お前まへの様ような者もの共どもが多おほいので、人ひと々は互たひに仲な好よくすると云いふ事ことを忘わすれて、自じ分ぶんばかりを得えさよう……而そして人ひとの泣なくのは何なにんとも思おもはないと云いふ、世よの中なかになつたのだ。斯こんな事ことだつたら人間にんげんの世界せかいと云いふものは、山やま奥おくの狼おほがみや獅し子この群ぐんとちつとも

異ちがふ所ところが無ないのだ。其それと云いふのは、皆みななが、ほんとうの自じ分ぶんと佛ほとけとを忘わすれてゐからだ。此この事ことを報しらせ知しる爲ために、私わしが遠とほ方はたからわざ／＼使つかひに來きたのだ……何なにうだ佛ほとけ様の思おぼ召めしが少すこしは判わかつたか。」

お爺ぢいさんは夢む中ちゆうになつて云いひました。すると太た郎らうは少すこし離はなれて、

「えへん、僕ぼくにはそんな事ことは一寸ちゆうとんも判わからない。僕ぼくは力ちからさへあれば別べつに望のぞましいものや欲ほしいものは無ないのです。」

「困こまつたものだ。」

お爺ぢいさんは云いひました。

「では、僕ぼくは暴あはれに行いきますから……」

「お前まへは必かなつと俺わしの名なを呼よんで淋しみしがる時ときが來きる。」

「馬うま鹿かな、此この僕ぼくにそんな事こと……」

「ではお爺ぢいさん左さ様やうなら。」

「では、可哀さうな子供左様なら。」

お爺さんと太郎とは思ひ／＼の事を考へ乍ら南と北とに別れました。太郎がお山の一番高い所から振り返つて見ますと、最前のお爺さんは、杖をつき乍ら下の町の方へトボ／＼と歩いて行きました。

「面白いお爺さんもあつたものだ。」

考へながら太郎はお山の奥へ這入つて行きました。

道に迷ふた太郎は隣村の大きな杉の木と、澤山の藁葺の屋根とは見へませんでした。終ひには歩けない程草や雑木の茂つてる所へ出て了いました。だけど太郎は恐ろしいとも怖いとも思ひませんでした。太郎は其んな事には困りませんでした。けれど、道が段々判らなくなる一方で、終ひには木も草も無い岩角だらけの峻しい道になつて来ました。而して山の頂上に出ました。前の方には雪を頂いた大きな高い山々が、ニヨツボリそちこちに並び立つて居て、唯だ其下を舞いてる雲が、紫や

紅や紺青やに漸時に變つて行くのが見へるだけです。だけど太郎は元氣でした。一つも困るものはありませんでした。雨が降つて来れば、身を隠す岩穴もあります。風が吹いて来て砂や小石を巻いて、ぶつかつて来れば、隠れる場所もありました。腹が減つても咽が渴いても、元氣な太郎は困つたとは思ひませんでした。だけど、話する何人も居りません。此處には恐ろしい獸さへ居ないので、途方に暮れた太郎の前にはお天陽様も見えなくなりました。冷い淋しい風が太郎の袖をかすめて吹き渡りました。歸らうと思ひましたが歸るべき道さへも判らなくなりました。遠くの方で、ライオンの鳴く聲が聞へてます。太郎の眼に久し振に涙が滲み出ました。「お母さんは今時分何をしてるだらう、嗚ぞ俺の事を心配なさつてる事だらう。俺は世間の奴等を相手に敵を取る事が出来た。——だけど俺のやつた事は好い事だつたらうか——俺は何んだか淋しくなつて来た。もう一度村の野原が見たい。あの汚い家に歸つて見たい……いやまてよ……俺は力さへあればと威張つてた事を後悔し

てるのではなからうか……いやそんな事はない、そうぞ、さつき、あのお爺さんが後悔する事はないかつて散々に云ふたつけ、やつぱり村が戀しい、お母さんが懐しい、友達にも會ひたい。……苦しくなつた、せつなくなつた。やつぱり俺は佛様を忘れて居たのかしら。人間は力ばかりでは満足出来ないものかしら……あ、佛様今からあなたにおすがりします。哀れな私を救つて下さい。助けて下さい。佛様!! 佛様!!

太郎は大きな聲で、泣きながら、天に向つて叫びました。すると不思議ではありませんか、何時の間にか太郎の眼の前には、最前のお爺さんが立つて居ました。

「何うだ、わしの云ふ事が判つたか。」

お爺さんは嚴やかな聲で斯う申します。太郎は戦へながら、

「能く判りました。私をもう一度お母さんの所へ返へして下さい。佛様哀れんで下さい。」



太郎は地に伏して泣きました。するとお爺さんは、

「では私の脊におぶさり。」

と親切に云ふて呉れました。而して太郎はお爺さんの脊に負はれて、忽ち戀しい戀しいお母さんの所へ歸る事が出来ました。お爺さんは夢の様に消えました。

「お母さん、僕はもうお母さんの側は離れません。」

太郎は、びつくりして居るお母さんにしがみ付いて、大声上で泣き乍ら、斯う申しました。すると、お母さんも太郎を

両方のお手て、確つかりと抱いて、

『お前は汚い家に住つて、まづい物を食べて居るけれどもお母さんの子ですよ、お母さんは、お前の事を何んなに心配したらう。』

お母さんも涙聲で斯う仰言りました。

『お母さん!! 僕此れから皆んなと仲好く致します。』

太郎は元氣のある聲で、きつぱりと申しました。(をほり)



風の神様 (童話)

春になつて、ボカボカした日がつゞきますので、ある、高
いお山の上ですんでゐた風の神様も、どうも退屈でなりませ
ん。なにかおもしろいことでもないかしらと、のそのそお山

を下りて下界の方へあそびにまわりました。一體この風の神様はきげんのよい時は
たいそうおとなしい氣立てのよい神様ですが、何か氣にいらぬことでもあらうも
のなら、それこそ大へん、おそろしい亂暴なことをするのでした。

けれ共、風の神様は、ボカボカした春の日が、たいそう好きでしたから、この
ごろは、めつたに、怒つたり、亂暴をしたりすることはありませんでした。

お山を下りた風の神は、やがて、麓の廣い野原へまわりました。見ると、すみれ
やたんぽぽが、そこら中に咲いてゐます。風の神様はニコ／＼して、

「おやおや、きれいな花がたくさん咲いてゐるぞ。ああ、いゝ匂がするぞ。おや危ない、いま少しで、すみれの頭をふみつぶすところだつた。」

風の神様は、大きな鼻をビクビクさせながら、たくさんの花のあひだを、そつと歩いて行きました。久しぶりで、お山を下りてきたのだから、今日はひとつ、世の中のものをつんと、よろこばせてやらうと考へましたけれども、中々よい考へがつかまません。

大きな風の袋を、しつかりとつかんで、つひうかうかと、考へこみながら歩いてゐますと、きふに、足の下で、

「あ、いたつ。痛い！」

と、大きな聲をだしたものがああります。風の神様はびつくりして、よく見ますと、可哀想に、蓮華の花が、大きな風の神様の足にふまれて、泣いてゐます。風の神様は、いそいで足をあげて、



「おや、おや。これはわるいことをした。わしは、いま、考へごとをしてゐたものだつたから、知らなかつたのだよ。」

かう言ひながら、れんげの花を抱きおこして、きれいに、土をおとしてやりました。それでも、れんげさうの花は、頭をさすりながらシクシク泣きじやくつてゐます。

青い空では、お日さまが、カンカン光つてゐますので、そこら中のすみれの花やれんげの花が、いかに、こゝろもちよささうに眠つてゐます。

かあいゝすみれの花が、てんでんに小首を、かしげて、眠つてゐるのを見ると、

風の神様は、一つここで、すみれの花たちを、よろこばせてやらうと考へました。それには、あたたかい風を、スーッと吹かせてやつたら、すみれの花が、きつと心もちよくねむれるだらうと思ひましたので、持つてゐた風の袋を、チヨツとあけてあたたかい風をスーッと吹きだしました。

さうすると、今までこゝろもちよくねむつてゐたすみれの花があつちでもこつちでも、ポツコリ／＼頭を起して、

『だれだい、人のよくねむつてゐるのを、邪魔するのは。——あれ、首がおちるぢやないか。おれたちの、こんなほそい首が見えないのか。こら、こんなに赤く血がにちんできた。とんでもないわるいことをするやつがきたものだ。』

てんでに、大きなこゑを出して、どなりまゐります。さつき頭を、ふみつけられたれんげは、なほさらいたくなつたので、大きな聲をだして、

『そればかりぢやないよ。おれのあたまは、こんなにふみにぢられた。ほんとに、

とんでもないばかな目にあつた。』

と、ブンブン憤こつてゐます。

風の神様は、たいへんあてがちがつたので、頭をかきながら、

『ホイホイ。これはしくぢつた。』

と、いそいで袋をかついでにげだしました。

せつかく野原の花をよろこばせてやらうとしたのに、かへつてあべこべにけんつくをくはせられたのですから、いつもなら、たいへんおこりたてゝ、暴れたかも知れませんが、きげんの上かつた日でしたから、ちつともおこるどころではなく、こんどこそは、なにかよろこばせてやらうと思つて、どしどし歩いて行きました。

小川の上に架かつた白い橋を渡つて、こんもりしげつた森の中へ入りますと、赤い椿の花のかげに一羽の鶯が、おもしろさうに、唄をうたつてゐます。ホーホケ

キヨケキヨ。ケキヨ、ケキヨ。ケケツキヨ。ホウホケキヨ。

風の神様

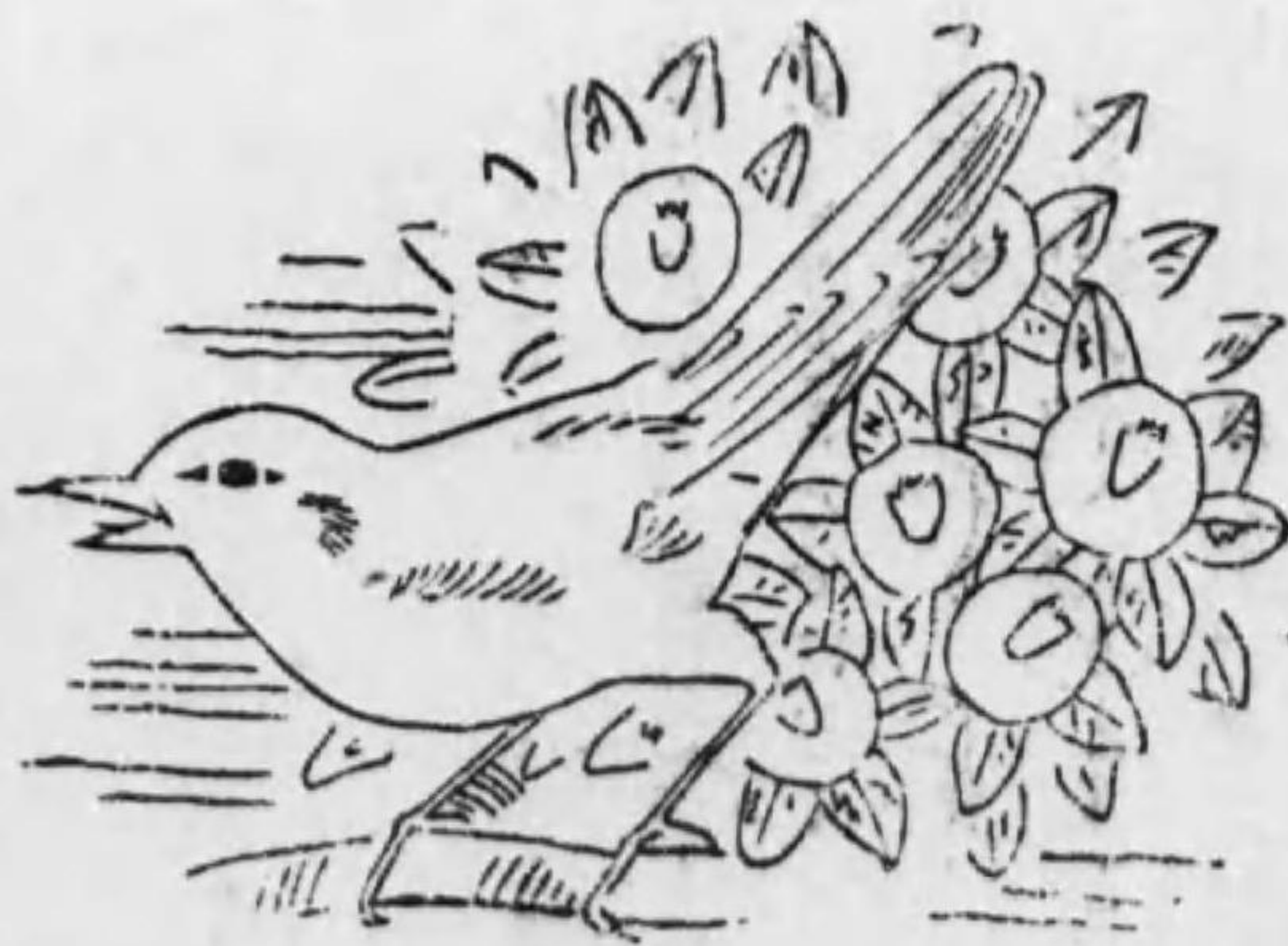
十四

風の神様は立ちどまつて、その唄にききとれてをりました。いかにもきにい
ましたので、一つあのうぐひすをよろこばせてやら
うとおもひました。それには、やつぱりあたたかい
風を、スリツと吹いてやつたらよからう。すみれの
やうに細い首ぢやないから、うぐひすは、泣きだす
こともあるまいと、そつと袋の口をゆるめますと、
なんともいはれない氣持のよい風が、椿の木の方へ
吹いていきました。

うぐひすは、よろこんで、まへよりも一そう、う
つくしいこゑで唄をうたひました。それをみると、

風の神様は、大満足で、

『よし、よし。これでやうやく俺の願ひが叶つた。』



と、ニコ／＼しながら、だんだん袋の口をゆるめますと、こんどは、つよい風が
ソツと吹き出して、椿の木が、にはかに、ユラユラうごきだしました。すると、い
ままで、唄をうたつてゐた鶯は、きうにだまつてしまつて、小さい目玉を、キヨロ
キヨロさせながら、

『だれだい。そんなに枝をゆすぶるのは？。わたしのからだがおつこちてしまふぢ
やないか。』

細い聲ですけれ共、力のあるこゑで怒鳴りました。その拍子に、赤い花が一つポツ
タリと散りました。うぐひすは、おどろいて、椿の木から、どこかへとんでいつて
しまひました。

風の神様は、がっかりして、

『ホイ、ホイ。またこれはしくぢつた。こりやいけないわい。』

と。重い袋を抱えながら、すた／＼歩きだしました。見ると、すぐ前のひろい田圃

の中で、二三人の子供が、風をあげてあそんでゐます。けれども、その日は、ちつとも風がないので風がちつともあがりません。子供たちは、一生懸命にあせつてゐまうけれども、なかなか風はあがりさうにもしません。

風の神様は、ニコ／＼しながら、

『よしよし、こんどはしくぢらないぞ。わしがここから風を吹いてやつたら、きつとあの子供たちはよろこぶにちがひない。』

と、一人できめてしまつて、とほくの方から、そつと風を吹いてやりますと、風がだんだん、あがつていきます。

子供たちは、大よろこびで、どしどし糸をのばしてやります。風の神様は、そらこんどこそうまくいつたらうと、大きな鼻をうごめかしながら、だんだんつよく吹きだてますと、風はどしどしたかくあがつてゆきます。そのうちに、あまり袋の口をゆるめすぎたので、強い風がブツと吹きだしますと、そのはづみに、子供たち

の風の糸は、ぶつつりと切れてしまつて、風はどんどんどこかへ、とんでゆきます。子供たちは、ポカンとして切れた糸を、たぐりながら、

『チエツ！ひどい風だな。なんだつてこんなひどく吹くんだらう。』

と、ブンブン憤つてゐます。これをきくと、風の神様も、氣の毒になつて、

『ホイホイ。これは、これは。また大しくじりだ。どうしてあんな細い糸をつけておくんだ。』

と、ブツブツ言ひながら、またすたこら、すたこら逃げだして、埃のいつばい立つてゐる広い道をどんだんかけていきました。

いくどもいくども、失敗りつづけたので、風の神様も、たいへんがっかりいたしました。そこで、こんどは、よく考へたあとで、なんでもにぎやかな町の方へでかけるにかぎると思ひました。

町へ行けば、なにかきつとおもしろいことが目につくだらうと、考へながら、だ

んだん町の近くへまわりますと、たくさんの方が、みんなきれいな着物をきかざつて、ぞろぞろあるいてゐるのが、目につきました。なんだらうと思ひながら、そつと、そのあとへついていつて見ますと、それは、お花見だつたことがわかりました。なんでもそこは、町に近いある丘の上で、ちやうど櫻の花がまつさかりに咲いてゐました。

花のとんねるをくぐつて、大きいの人や、犬などが、ぞろぞろ、びよこびよこあるいてゐます。こどもたちは、その中をとびまはつて、鬼ごつこや、陣取りをしてあそんでゐます。それらのやうすが、いかにもおもしろいものですから、風の神様は、高い櫻の木の枝の陰にかくれて、そつとのぞいてゐましたが、そのうちに、どうしたのか例の袋の口が少しゆるんだので、スーツと風が吹きだしました。それが櫻の木の枝にあつたものですから、雪のやうに白い花片が、ヒラヒラ散りはじめました。

下をぞろぞろあるいてゐる人たちは、雪のやうな花片を、あたまから浴びせられて、よろこんでゐます。そして、上の方を見あげながら、

「どうだい。この花の散るのは、きれいなものぢやないか。それにきもちのよい春風が吹いてくる。」

と、口をそろへて申します。

風の神様は、そろそろ、有頂天になつて、

『そら、こんどは、巧いくぞ、こんどはしくじつてたまるものか。』

と、袋の口をそつとゆるめたまふ、ちつと下の方の有様を見てゐます。ちやうどこの時、風の神様のすぐ眼の下を、一人の立派な若い紳士が、フロックコートを着て、高い山高を光らせながら、ステッキを小脇に抱えてスタスタ歩いてゐました。

そのあとへ、たくさんの人たちがぞろぞろ、ついてあるいてゐます。山高帽の紳士は、馬鹿にたかぶつた顔をして、ときどき、うしろの人たちの方をふりむいては

大きな聲で話しをしかけておりました。なんでも、それは自分の自慢話のやうでした。風の神様も、その話にうっかり聞き耳を立てておりましたが、そのすきにすつかり



袋の口があいてしまつたからたまりません。おそろしい強い風がブーッと吹きだしたと思ふと、例の紳士の帽子は、スツテンコロリンと吹きとばされて、広い通りを、コロコロとんでいきました。

すると、そのとたんに、ワアツと、崩れるやうな笑ひ聲が一どにわきたちました

まあ、どうでせう若い例の紳士は、クルクルに禿げた坊主頭を抱えながら、とんでゆく帽子のあとを追かけて行くではありませんか。

人たちは、思ひがけない若い紳士の、クルクルにはげた頭を見せられたのと、帽子を追つかけるそのやうすがをかしいので、腹をよつて笑ひこけました、今までとびまはつてゐた子供たちまでが、

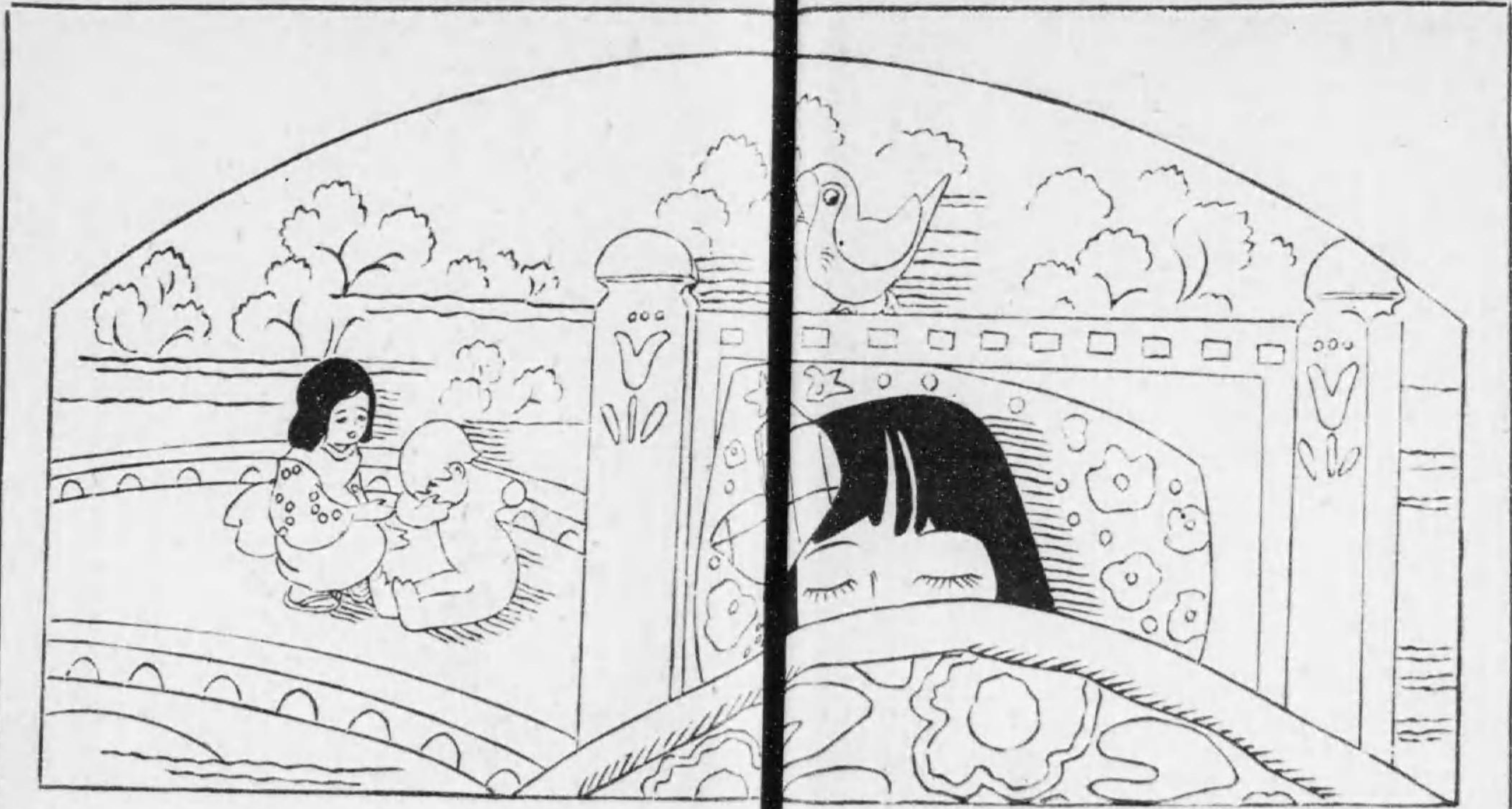
『あ。あの小父さんは臺灣坊主だ。』

と。手をうつて一どにわらひたてました。紳士はやつとのこと、山高をつかまへるが早い、真赤な顔をして、こそこそどこかへにげてゆきました。

風の神様は、やつとのこと、のぞみどほりの、たいへん面白いことを見ましたので、軽くなつた袋を抱えたまう、すぐに白い雲にのつて、またもとの高いお山の上へかへつてまゐりました。

風の神様

それから、風の神様はいつも機嫌のよい時には、その日の面白かつたことを思ひ出しては、ニコニコ笑つてゐました。(なはり)



小人の國 (童話)

昨夜見てきた

夢の國

銀のお橋で

小人と二人

まゝごとあそびをしてゐたら

赤い小鳥がとんできて

小人のお手を

とつてつた。

小人がシクシク泣いてゐる

小雨がシトシト降ってくる

昨夜見てきた

夢の國



魔法の笛 (童話)

あるところに、一人の若い牧羊者がいました。はてしもない広い草原の牧場にでて、かぞいきれないほど群らがつてゐるたくさんの羊の番をするのがそのつとめでございました。

牧羊者は、たいへん正直な、心のすなほな、情けぶかい人間でしたので、みんなから、可愛がられました。そればかりではなく、たくさんの、牧羊は、まるで王様みたやうになつかしんで、牧羊者の言ふことをよく守りました。見わたすかぎり果もない広い野原の牧場の中で、あそび群らがつてゐる羊たちと一しよに暮らすことは、そんなに面白いことではありませんでした。けれども、心のすなほな若い牧羊者は、ほんとにそれで満足してをりました。

不平も、悲しみも、恨みもなく、廣い野原の草の上にねそべつて、羊の群れをながめては、時々草笛を吹いたり、やさしい歌を唄つたりして、自分で自分の心をなぐさめてをりました。夢のやうな白い花がヒヨロヒヨロと牧羊者の足許でおどつてゐます。羊たちは、牧羊者のまはりをとりにまいて、草を食べたり、戯れたりして、のどかにあそびまはつてゐます。

まだ小さい小羊は、牧羊者の足許に、まるくなつてうづくまつたり、小さいあたまをおしついたりして、しまひには細いやさしい眼をとちて、静かにねむつてしまひます。こんな可愛らしい羊たちをながめては牧羊者はいつもこんでゐました。決して他の人を羨しいとさへ思つたこともありません。

人のことを羨んだりしますと、しまひには何かしら自分のやつてゐることがつまらなくなつて、不平やら悲しみやらが生れてくるものです。それでは幸福な日をおくることはできません。



かな春の唄をさかしてくれました。そして、たくさんの羊たちは、まい日まい日心

長いあひだに、牧場の羊はだん／＼ふえていきました。牧羊者はじぶんの愛らしいお友だちの増えてゆくのが何よりもたのしみなことの一つでした。

牧場のやはらかい草はきれいな花を咲かせて見せてくれました。青い空の上では、雲雀が、のど

もちよくそだつていききました。

とほいお山が紫色にかすんで、夜の幕がおしよせてきますと、牧羊者は角笛を吹きならして何百といふたくさんの羊の群れを、小屋の中につれていつて、それから自分もそのそばの小屋に入つて、たのしい夢を結ぶのが常でございました。

二

ある寒い日でございました。この牧場へ一人の汚い乞食のお婆さんがどこからかまわりました。

『わたしは、まだ朝から御飯を一つぶだつていたとかないんです。なにか少しわけてくださいませんか！』

と申します。見ると乞食のお婆さんは、眼が悪るいらしく、しよぼくと凹んだ目を光らせながらこの寒いのにうすつべらな着物をきてぶる／＼慄えてゐます。もともと、大へん情ぶかい牧羊者は、大そう可哀想に思つて、乞食のお婆さんを、自分

の小屋へつれてまわりました。そして、急いで火を焚いてやりました。

お婆さんがよろこんで火にあたつてゐるうちに、牧羊者は棚の上から一片のパンをとり出しました。それは牧羊者の大事な、お夕飯のパンなのでした。

『お婆さん、わたしはこれつきりしかパンがないんです。さあ、おあがりなさい。』かう言ひながら、牧羊者は一片のパンを、汚いお婆さんの手の上にのせてやりました。

お婆さんは涙を流してよろこびました。いくともいくともお禮を言つて、いかにもおいしさに、パンを食へはじめました。

お婆さんの凹んだ眼が奥の方で光つてゐます。頭の毛はもう眞白になつて、黒ろい毛なんか一本だつて生えてゐません。ぼろ／＼に破れた衣物の間から、寒さうな腕が見えてゐます。情ぶかい牧羊者は、自分の着てゐた上着をぬいで、お婆さんの肩からかけてやりました。それから、薪をどし／＼くべて、

「お婆さん、あなたはゆつくりあがりなさい、それから、火もこんなに燃えてゐます、薪はいくらでもありますから、たくさん焚いていゝんですよ。わたしはすぐ牧場へ行かなくちやなりません。かあいそくに羊たちは、どんなにわたしをさがしてゐるでせう。わたしがちよつと見えなくなつても、羊たちはしんばいするんですから……」

かう言ひながら、牧羊者は立ちあがりました。お婆さんは、微笑みながらうなづいて、

「あー。あなたのおつとめの邪魔になつてはいけません。わたしは一人でゆつくりいたゞくことにしませう。」

お腹もすつかりできましたし、その上、火にあたることができなかったので、お婆さんはすつかり元氣がついてまゐりました。若い牧羊者は、よろこんで牧場へかへつて行きました。

牧羊者は大事の一片しかないパンを、乞食のお婆さんにやつてしまつたので、その日の夕御飯を一度ぬきにしなければなりませんでしたが、そんなことはちつとも苦にしないで、かへつて心の中で、よい施しをしたものだとよろこんでをりました

三

牧羊者が、小屋を出て行つたのを見ると、お婆さんは、急にニコ／＼して、

「ほんとに聞いたよりは情ぶかい人だ。これならりつばな王様になることができるけれども一べんだけではわからないから、もう一度きてためしてやらう。そして、いよく情ぶかいすなほなことがわかつたら、その時こそ魔法の笛を授けませう。」と、獨り言を言つてゐます。そのうちに、いつかお婆さんも小屋を出て、どこかへ行つてしまひました。

一體、この汚い乞食のお婆さんは、なんでせう。ほんとの乞食なんでせうか。それにしても、どこから来て、どこへ行つたのでせうか？

その晩、親切な若かい牧羊者は、おかげで御飯をいただくことができずして、たから、日がくれて羊たちを廣い小屋の中へ入れてしまふと、すぐ床の中へもぐりこみました。けれども、ちつともかなしみませんでした。

あんなに年がよつてから、寒くてもあたゝめてくれる人もなし、お腹が空もじくなつても御飯もろくくいたけけないで、よぼくと乞食をして歩くお婆さんはほんとに哀れなものだ。それを少しでもなぐさめてやることのできた自分を、大へん幸福だと思ひました。

『明日のあさは、まだお日様の出ないうちに町へ行つて、パンをもつて來なければならぬ。上着もなくては寒いけれども、晝間は、牧場の草の上にてねてゐたら寒くもあるまい。』

そんなことを考へてゐるうちに、いつか、ぐつぐつと眠つてしまひました。そのあくる朝になると、まだ暗らしいうちに牧羊者は、いそいで町の主人のところへか

けました。お日様が向ふのお山から出る頃までには、町から歸へつてきて、羊たちを廣い牧場へ出してやらなくてはなりませんので、大いそぎで、町へまゐりました。牧羊者が、町の主人のところへきたときに主人は、牧羊者が上着をきてゐないのを見て「どうしたんだ。この寒いのに上着も着ないで？」と怪んでたづねましたが牧羊者は、たゞ黙つて笑つてゐました。

そこでいつもの通り、三日分のパンを渡されると牧羊者は、また大いそぎで、どん／＼牧場へかへつてまゐりました。

ちやうどこの時、お日様がニコ／＼と、優さしい顔をお出しになりましたので、羊たちは、もうすつかり眼をさまして、早く牧場のひろい草原へ出たくてたまりません。小屋の戸が開くが早いか、一散に野原の中へかけ出して行きました。そのあとで牧羊者は、やうやくのことで、昨日の晝からはじめての御飯にありつくことができずして、

四

それから三日目のこととございます。若かいすなほな牧羊者は、三日分のパンもあと晩の分だけしかのこつてゐないことを考へながら、牧場へ出ました。そして草の上に腰をおろして、草笛を吹いてゐました。高い低い草笛の音がきこえますと羊らは、そのまはりをとりかこんで、うつとりと聞き惚れました。そこへまたいつかの汚い乞食のお婆さんがどこからかやつてまゐりました。牧羊者の姿を見つけるとうれしさうにお婆さんは、ニコ／＼しながら、近づいてきました。

『わたしは、また今日も朝から御飯をいたゞかないんです。もう息がきれて歩くこともできません。なにか少し分けてくれませんか。』と申します。

見ると、お婆さんはまつたくお腹が空つてゐるらしく、杖をついて、しよんぼりと立つてゐます。それでもこの前のときに、牧羊者が着せてやつた上着は、さもあ

たたかそうに着てをります。

『お婆さん。では小屋へまゐりませう。たしか少しパンがあるはずですから。』

牧羊者は、やさしく言ひながら、さきに立つて、小屋の中へはいりました。いそいで、火を焚きつけてそれから又、棚の上に残つてゐる一片のパンをとつて、お婆さんにやりました。

『わたしは、また今日もこれつきりないんです。薪ならいくらでも焚いてくださいよ。わたしはすぐ牧場へ行きますから。』

さう言ひながら牧羊者は、牧場へ出て行きました。その足音が、とほくの方へ消えてゆくと、お婆さんは急に、ニコ／＼點づいて、

『あー、情けぶかい若い人だ。これならりつばな王様になることができる。では、あしたの朝になつたら、魔法の笛をやることにしよう。』

と、獨り言を言ひました。火がどん／＼燃えたつて、凹んだお婆さんの眼が光つて

魔法の箱
 ゐます。

九四

そのうちに、お婆さんは、きりつとした顔をして、すつくり立ちあがつたかと思ふと、もうどこへか煙のやうに消えて行つてしまひました。

一體、この汚い乞食のお婆さんは、ほんとに乞食なんぞでせうか？。いゝえ。さうぢやなかつたのです。ほんとは、ある深い森の中に棲んでゐる魔法つかひなのでした。魔法つかひといつても、むやみに人を困らせたり、苦しめたりするやうな事はなく、おとなしい、氣立てのよい魔法つかひでした。けれ共、心のよくない人が大の嫌ひで、そんな人は、ひどいめにあはされました。それにひきかへて心の正しい人は、たいへん幸福をさづけてもらひました。魔法つかひは、森の黒い鳥からこの若い牧羊者の、たいへん情ぶかい親切なことをきいたので、もしほんとに森の鳥の話のやうに情ぶかいことがわかつたら、何か一つ幸福をさすけてやらうと、それを試しに、わざ／＼汚い乞食の扮装をしてきたのです。

ところが、二度までも、たつた一つはかない大事のパンを惜しげもなく分けてくれた親切を見たのですから、もうすつかり、かんしんして、大きな幸福を授けてやらうと定めてしまひました。それには、今この國の王様が、たつた一人のお姫様の婿様を探しておいでのことを知つてゐますので、そのお婿様にしてやるのが一番大きな幸福だらうと思ひました。

けれども、正直な牧羊者は、ちつとも、そんなこととは知りません。ほんとの乞食のお婆さんだとばかり思つてゐました。

五

さて、親切な牧羊者は、その晩も、また、御飯を食へることができないでやすみましたが、そのあくるあさは、いつもの通り町へ行かねばならぬ日でしたので、早く起きました。といふのは、お日様の出る前に、牧場へ歸へつてこなければなりませんから。

そこで、いそいで支度をして小屋の戸を開けるなり外へ出ますと、おどろいたことに、いつもの乞食のお婆さんが、戸口にしよんぼりと立つてゐるのではありませんか。

牧羊者の姿を見ると、お婆さんは、きふに行手に立ちふさがつて、

『まあ、こんなに早く。どこへ行かうといふんです。まだ、お日様さへ出ないぢやありませんか。』

と申します。その聲は、いつもよりはつきりとしてゐました。

『でも、わたしは今日が町へ行つてくる日ですから——それに、お日様が出る頃は、羊たちを小屋から出してやらなくちやなりませんから。』

それを聞くと、お婆さんは急にニコニコして、

『それ。それ。その事で今日はあなたに話したいことがありますよ。今日からもう牧羊者を、さつぱりとやめてしまふのです。町へ行つたら、すぐに主人から暇を貰

つておいきなさい。』

と申します。若かい牧羊者は、お婆さんの様子がいつもとたいへんちがひますのでこれは變だと思ひました。そうして仔細思ひがけないことを言ひますので、

『お婆さん、あなたはいつでもそんなことを言つたことさへないのに、今日はどうしたと言ふんです。』

と、まぢめに言ひました。

『そんな強情なことを言ふものぢやない。老人の言ふことを決して疑がうものぢやありません。みんな、そのうちにわかる時がくる。あなたは、今日これから町へ行つたら、すぐ暇を貰つて、王様のおいでになる町へ行つてごらんさい。そうして町の入口の建札を、よく見るのです。きつと大きな幸福が、そこにあなたをまつてゐる。わたしは、あなたに、りつぱに恩がへしができるので、こんな嬉しいことはありません。』

お婆さんは、元氣のいゝ聲で、かう言ひながら、ポケットから古めかしい一本の角笛を出して、牧羊者の手ににぎらせながら、

『この角笛は、不思議な力をもつてゐて、もしもあなたが困つたことのある時にはきつと役に立ちます。これを御恩がへしのしるしにあげるのです。さあ、さあ、それでは早くおいでなさい。』

お婆さんは、熱心にすゝめますので、はじめのうちはそんなことを、ほんたうとは思ひませんでした。が、しまひには、とうとう、その氣になつて、お婆さんの言つた通り、主人に暇をもらつたら王様のおいでになる町まで行つて見ようと考へました。

お婆さんは、早く早くと申しますので、牧羊者は御禮もそこそこに、大いそぎで町へおりて行きました。お婆さんはその後姿を見送りながら、

『これで、りつばな王様ができるのだ。正直な、情ふかい心ほど美しいものはな

い。』

と、獨り言を言つて森の中へ消えて行きました。それにしても、町へ行つた若い正直な牧羊者は、これからどんなことになるのでせう。

六

さて、お話はつて、この國には、たいへんお寶のあるさうしてお強い王様が、おいでになりました。りつばなお寶は、いくつものお庫にいつばい入つてゐて、その数の多いことは、どこの國にもまけませんでした。

まだ、そればかりではなく、強い兵隊がたくさんあつて、いままでどこの國と戦争をしても、一べんだつて負けたことがありませんでした。

こんなわけで、この國の名前は、そこら中の國々に響きわたつて居りました。王様には、天にも地にも、代へることのできぬ、たつたお一人の美しいお姫様がおありになりました。この國の威勢を聞きつたへた方々の國の王様からは、どうかお姫

様をいただきたい。でなければ王子を、お姫様の婿様にさしあげたいといふことをあつちからも、こつちからも、降るやうに言つてまわりますが王様は、中々御承知になりませんでした。

王様はいつも、

「姫の婿は、姫の自由に任せよう。姫の一ばん好む王子を迎へて、この國の後嗣としよう。」

と、仰言つておいでになりました。

ところが、お姫様は、お姿のお美しいばかりでなく、たいそうお心の強い方でしたので、普通はづれた方法で、お婿様を決めようとなさいました。

そこで、お姫様は、すつかり御自分のお考を、王様に申し上げて、おもしろい方法で、お婿様をお探しになりました。と申しますのは、日を定めて、お婿様になりたい人たちを、みんな御殿のお庭に集めて、いろ／＼なむづかしい三つの難題をだ

して、それを首尾よくやりおほせた人をお婿様になさるといふことなのでした。ですから、王様の御後嗣になれる人は、よその國の王子たちばかりぢやなくて、その三つの難題を、きりぬけた人ならだれでもなれるので、すから面白いではありませんか。

そこで、王様はお家來に言ひつけて、方々の町の入口へ大きな建て札を建てて、この面白い御布告をおだしになりました。

それには、

「王様のお婿様になりたいと思ふものは、この次の七日に、御殿の廣場に集まれ。」と、かいてありました。

これを見た、よその國の王子たちや下々の人民たちは、その奇抜なことに、おどろきました。そのうちに、諸方へこのことが知れわたりますと、よその國の王子たちは、自分こそ一つあの美しいお姫様のお婿様になつて、あの強い國の王様の後嗣

にならうと手に唾をつけて、その日のくるのを待ちもうけました。一方、王様の方では、とても人間わざではできないやうな難題を、いくつも／＼お考になつて、そのときのお支度をしておいでになりました。

七

お話しが、又もとへ戻ります。牧場を下りてきた若かい正直な牧羊者は、町の主人のところへ行つてお暇をもらひますと、さつそく王様のおいでになるとはい町へでかけました。

山を越え、野原を越えて、いく日も歩きに歩いてから、やつとのことで王様のおいでになる町の入口へ、さしかゝりました。見ると、なるほど大きな建て札がたててあります。それには、

「王様のお後嗣にならうと思ふ者は、次の七日に御殿の廣場へ集まれ。その上で三つの難題を、やりおほせたものはこの國の後嗣となることができるが、もし難題を

解くことのできぬものは早く逃げてしまへばよし、さもなくば生命がなくなる。」と、書いてあります。これを見ると牧羊者は、

「は、あ、お婆さんの言つた建て札といふのは、これだな。」と考へました。王様のお後嗣を望むなどは、正直な牧羊者には、あまり大きすぎる望みですけれ共お婆さんの言つたのは、たしかにこのことですので、牧羊者は、やがて

「さうだ。とにかく王様の御殿へ行つて見よう。今日は丁度七日なのだ。お婆さんの呉れた角笛がほんとに役に立つなら、三つの難題も解けるかも知れない。」

と考へつきました。丁度、この日は七日でしたから、方々の國の王子たちが御殿の廣場へ集る日でございました。そこで牧羊者は、今まで見たこともない、きれいな廣ろい町の中へだんだんと入つて行きました。

町の人たちは、みんなが今日の御殿のやうすの話で、持ちきつてゐましたが、若

かい牧羊者が、来たといふことは誰も知りませんでした。

やがて、御殿のちかくまでまわりますと、高いお屋根が森の中に見えました。見ると、御殿の入口にも、さつき町の入口にあつたのと同じ建て札が立てゝあつて、たくさんの人たちが、まつ黒いほどたくさんあつまつて見てゐます。

牧羊者は、どし／＼御殿の中へ入つて行きました。そのときはもう、御殿の廣場いつばいに、方々の王子たちや公子たちが、一ぱいにつめかけて居りました。みんなりつばな衣服を着かざつた人たちばかりの中へ、見すばらしい若い男が入つてきましたので、みんなは、いやな眼をしてジロ／＼牧羊者を見つめました。そしてこの見すばらしい男が、やつぱり自分たちと同じやうに、王様のお婿様を望んで来たのだとわかつたときに、多せいの王子たちや公子たちは、みんな心の中で、嘲笑つてゐました。

「あんな汚い、見すばらしい牧羊者なぞが、いくら智慧があつたつて、王様のお婿

様なぞになれるものか、とんだ氣の狂つた奴だ。」

と、みんないやな眼つきで、ジロ／＼見つめてゐるのですが、正直な若い牧羊者は、そんなことには、一向平氣で、時刻の來るのをまつてゐました。

八

やがて、定め時刻がまわりますと、王様とお姫様は、御殿の廣場へ出ておいでになりました。

大せいの人たちは、グルリとそのまはりに集まつて、どんな難題がでるか、と、耳をすましました。

やがて王様は大せいの人たちに向つて『今姫が三つの眞珠を投げる。それを拾ひあてた者だけが難題をきくことができるのだ。』と仰せられました。

そこでお姫さまが三つの眞珠を投げますと、蟻の様に群がつた大せいの人たちは、我れ勝ちに眼を皿の様にして探しまはりましたが、もとより三つよりない眞珠です

から、これをさがしてた人は三人よりないわけです。
 運よくもこの眞珠を拾ひあてた三人の中は二人まで、ある國の王子でございまして、一人はあのみすばらしい汚いなりをした牧羊者でございました。三人はまるで天へでも登つたやうに喜び勇んで王様の御前へ呼び出されました。これから三つの難題を出されるといふのです。王様は三人の者をつくづく御覽になりましたが、その中に汚いみなりをした男のゐるのに大へん驚きなされましたが、
 「御殿の裏の牧場にはたくさんゐるの兎が飼つてある。日の沈むころまでにその數を間違ひなく數へてくるのだ。」と最初の難題をお出しになりました。そこで三人はてんでに御殿の裏の廣い牧場へきて見ましたが、たくさんゐるの兎はまるで矢のやうに走りまはつてゐて、とても數へることなどはできさうにもありません。こちらの方で草を食べてゐたかと思ふと、もう見えなくなつて深い叢の中へ入つてしまひます。ゐないのかと思ふと二十匹も二十匹も一しよになつて光り物のやうに走つて行きます



三人は血眼になつて一匹二匹三匹と數へて見ましたがどうしてもわかりません。その中にどん／＼時刻はうつつてまゐります。もし日の沈む頃までに數へることができないと生命がなくなるのですから三人とも氣が氣ではありません。

その中に一人の王子は、

「こんな馬鹿氣たことができるものか。それよりも自分の生命の方がよつほど大事なんだ！」と呟きながらどこかへ消えたやうに逃げてしまひました。これを見たもう一人の王子もやつぱり心細くなつて、こそ／＼とどこかへ姿をかくしてしまひましたので残つたのは若い牧羊者ばかりになりました。

連れの二人の王子たちが逃げてしまつたのを見て、牧羊者も心細くなつたにはちがひありませんが、まだ日の沈むまでには時刻もあるし根氣よく數へて見ましたが中々わかりません。兎が草原にあつまつた時を見て、こゝぞといそいで數へ立てやうとしますがもうその中の五六匹は深い草の中に入つてしまつて別の方から新しい

のが十匹も二十匹も、せつかく數へた兎の中にまじつてしまひます。これにはさすがの牧羊者もがつかりして、太い溜息をつきながら草原の上にとつかと腰をおろしました。

どこか高い空の方で雲雀の歌がきこえてきます。牧羊者はこの時うつとりあの羊の住む牧場の有様を思ひ浮べました。それと一しよに牧羊者の頭の中には、あの汚いお婆さんから貰つた古い角笛のことが浮かんでまゐりました。

破れた洋服のポケットから角笛をとり出した牧羊者は靜かにそれを吹き立てました。細いゆるやかな音律が流れるやうに廣い牧場の原へひろがつて行きます。

牧羊者は、一心に「羊の唄」と名づけた得意の曲を吹きますと、小鳥でさへ啼く音を止めて聞き惚れる程美しい音が空いつばいにひろがつて行きます。

そうするとまあ不思議ではありませんか、今まであんなに飛びまはつてゐた兎の群が、みんな牧羊者のまはりに集まつてきてみんなおとなしくすわつたまゝその美

魔法の笛
 しい音を聞くやうに身動きもいたしません。小犬がなつかしい主人にあつた時のやうに逃げやうともいたしません。

牧羊者は喜んで急いで兎の數をはじめました。兎の數はどうしても九十九匹です。牧羊者はもうこれで安心だと草の上へねそべつたまゝ角笛を吹きつけました。

兎はやつぱりそのそばをはなれずにあそんでゐます。その中



にお日様がだん／＼西の山へ沈みかけますと、若かい牧羊者は勇みきつて御殿へかへつて、その數を申上りました。王様は二人の王子にもできなかつた難題をあつた牧羊者がしとげましたので、そのお驚きは一方ではありません。『こりや大變だ、然し第二第三の難題こそは！』とお考へになつて更に第二の難題をお出しになりました。

それは、御殿の穀物庫の中にある百石の青豆と百石の白豆とをませたのを一晩のうちにきれいに青豆は青豆、白豆は白豆とわけてしまふことでした。これにはさすがの牧羊者もギョツとしましたが、もう役人が牧羊者をつれてどん／＼お庫の方へつれて行くのですから仕方ありません。

九

見あげるやうな大きなお庫の戸口で役人は、

「あしたの朝までにこれができてゐなかつたら、お前の生命はないのだ」と嘲ける

やうに言ひました。牧羊者がお庫の中へ入りますと、外からはビンと錠を下ろしてしまつて逃げやうたつて逃げることもできません。

この時もう日は暮れてしまつて中は真暗ですが、戸の隙間から忍びこんでくる月の光りで見ますと、青豆と白豆がませてなるほど小山のやうに、うづ高くつもつてゐます。これを撰りわけやうとしたら牧羊者が一晩はおろかいく年もかゝることにちがひありません。

だん／＼夜が更けますと、外はしんとして物凄く静まりかへつてゐます。この時どこからともなく人の聲がして、

『早く笛を吹かないと大變だ。』

と申します。牧羊者はハッと氣がついて例の古い角笛を吹きはじめますと、さあどうしたことせう何十萬ともしれぬ大蟻がどこからともなく集まつてきて、その二百石の豆を運び出しました。

牧羊者は夢心地でそれを見てゐましたが、いく時間かたつて、朝のお日様がお庫の中まで入つてきた頃までにはさしもの豆がきれいにわけられてゐます。これを見た牧羊者の喜びにひきかへて王様のお驚きはそれこそどんなでしたらう。

王様は尻餅をつくほどお驚きになりましたが、これで二つの難題は美事に解かれたのですから、今度こそとても出来ないことをとお考へになりました。

あとの一つで美しいお姫様がこの汚い牧羊者をお婿様にしなくてはならなくなるかも知れませんが、おまけに王様の御位までこの牧羊者へおゆづりにならなくてはならなくなるかも知れませんが、王様はありつたけの智慧をおしぼりになつた末『御庫の中の山と積まれたパンを一晩中に食べてしまふのだ。それが一ばん最後の難題だ。』

と仰しやいました。これならどんなに牧羊者が怖しい力があつても、できないことですから王様は安心なさいました。

その夕方、牧羊者は大きなパンのお庫の中へ入れられました。なるほど中には足の入れ場もないほどパンがいつぱいに積んであります。

役人は庫の戸に錠を下ろしながら、

「あしたの朝になつて見ろ。パンが一片だつて残してあつたらお前の生命はないんだから」と言つて笑ひました。けれ共牧羊者は平氣です。朝になつたらこの役人が腰を抜かしてびつくりするだらうと心の中で笑ひながら夜になるのを待つてゐました。

十

その夜、又御殿の方までも美しい笛の音がひびきわたりました。けれ共だれたつて、あの牧羊者が吹く魔法の笛の音だとは知つてゐやう筈がありません。

お庫の中では何萬といふ大鼠が集まつてきて、山のやうに積まれたパンを食べておりました。

お前の膨れたねづみがどこからともなく出て行くときとすぐにあたらしい鼠が入つてきて夜の明けはなれるころまでにはさしものパンの山が、一片ものこつてゐません。牧羊者は今更のやうに笛の怖しい力を驚きましたが、それにしても、あの笛をくれたお婆さんは一體何者だらうと怪しみました。

王様は今度こそ出来ないことだとお考へになりましたので、七人のお役人に向つて、

「早くあの汚い男を連れて來れ、今度はきつと出来ないにきまつてゐる。」

と仰せられました。七人の役人はすぐにお庫の方へでかけました。そして心の中

では、

「あの汚い奴め今日は遂々生命がないんだ。」

と、笑ひながらお庫の戸をあけますと、牧羊者は平氣で戸口に立つてゐます。お庫の中を一眼見た七人の役人はアツと驚きの聲をあげてドツと尻餅をついてし

まひました。それもその筈です。あれほどのパンが一片もなくなつてゐるのですから。

これをごらんになつた王様とお姫様のお驚きはそれこそ全く口でも言はれぬほどでございましたが、難題といふ難題を美事に解いた牧羊者の不思議な力を感服なさつて、

『お前は一體何者か。どうしてそんな不思議な力を持つてゐるのだ？』とおたづねになりました。

そこで牧羊者はまつすぐに今までのことをかくさずに申し上げますと、さすがの王様もたいさう感心なさいます。

『お前は全く正直な情深い人だ。身分が立派でも心の悪い者はりつばな王様になれるものではない。心の美しい人が何よりも貴いものぢや、朕はもうお前を姫の婿に

することに承知した。お前は立派な朕の後嗣ぢや。』

と、仰せられました。貧しい牧羊者は、めでたく美しいお姫様のお婿様になりました。

心の正しい情ふかい牧羊者はそれから一生幸福に暮らしました。

これといふのも、あのお婆さんから貰つた、魔法の笛のお蔭ですが、牧羊者が正しい心を持つてゐたからでございます。



人は誰でも、正直で、そして、すなはで、情深いのが、ほんとうに第一でございます。
(をほり)

裁 判 の 鐘 (童話)



むかし、イタリーの南方に、岨はしい絶壁に沿つて、ある小さな町がございました。
それは、古い油繪などで見るやうな、それは、それは、美しい樂園のやうな町で
した。

丁度、その頃、この町は、大そう、なさけ深い王様の、御領分だったので、町の

人たちはほんとに、幸福な、日を送つて居りました。その頃のお話しでございます。

王様は、町の人たちの利益になることならば、どんなことでも、なさいました。これまでに、どのくらゐ、町の人たちは、王様のおかげで、利益になつたかわかりませんでした。けれども、王様は、少しもそれで満足なされないで、それからそれへと新しいことをお考へになりました。

王様は、ある日、町の裁判を、もつとよいしかたはあるまいかとお考へになりました。

「朕は、老人にも子供にも、みんな同じやうに裁判の出来るやうにしてやらねばならぬ。さうできねば、町のは、まだく幸福でないのだ。」

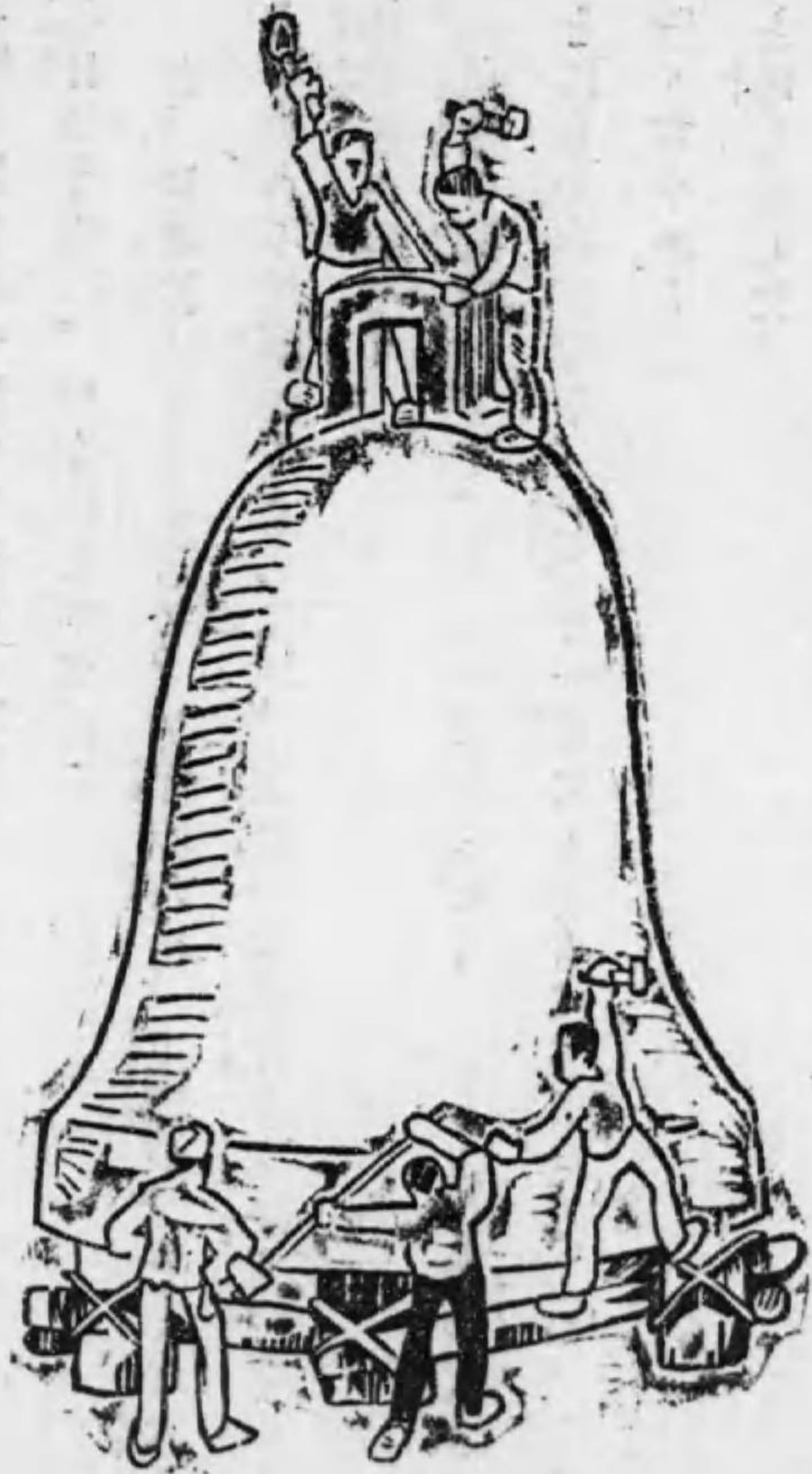
王様は、かうお考へになりました。けれどもなかなかかりつばなお考へはつきませ

ん。

王様は、だまつて、お考へになつてをりましたが、何をお考へになつたのか、急

に、ハタと膝をおうちになつて、

「さうだ。朕はそれに少しも気がつかなくつた。なんでも、大きな鐘をつくらせうわい。町のを幸福にしてやるにはこれよりほかに、よ



いことはあるまい。」と、微笑みながら、獨り言を仰言いました。そこで王様は、す

「お伴の人を呼んで、

「町の鑄物屋へ行つて出来るだけ大きな鐘をつくらせてくれ。それもいそぎぢや、七日のうちに、つくれと申せ。」

と、お命付になりました。お伴の人は、王様が、そんな大きな鐘を、何んになさるのかと不思議がりましたが、王様のお命付ですから、そのまゝ町の一番大きな鑄物屋へ行つて、

「王様の御命付ぢや、おまへのところで、できるだけ大きな鐘をつくつてくれ。それも大急ぎぢや。七日を一日たりともすぎてはならぬ。王様は大へんおいそぎのやうぢやから。」と申しました。

二

さて、鑄物屋の主人も、王様がそんな大きな鐘を、なんになさるのかと怪しみま

したが、日頃おなさけぶかい王様への御奉公はこんなときだと思ひまして、大せいの弟子たちを、はげましてとう／＼約束の七日までに、見あげるやうな大きな鐘をつくりあげました。

王様は、この大きな鐘をごらんになつて、大せいの人たちに運ばせて、市場の高い塔のさきへ、つりさげました。

そしてその鐘には、長い長い綱をむすびつけて、ほんの小さな子供でさへ、自由に手が届く位ひのところまでさげておきました。そこで、いよくしたくができあがりますと、王様は町中へお布告を出しました。

すると町の人たちは東からも西からも御殿の御庭の廣場へ黒蟻のやうに群つてまゐりました。

この國の人たちは、いつも王様から、お布告がでますと、みんな御殿の廣場へ集まつて、王様から直接にお言葉を聞くのでした。

人たちがいよいよ集りきつたころを見て王様は、いつもより、はればれとしたお顔で、宮殿のバルコニーへ御出でになりました。

町の人たちは今日はどんなことだらうと目を光らせながら立つて居ります。

王様は市場の高い塔の上につられた鐘を指しながら、

「町人よ、あれを見よ、あれは『裁判の鐘』ぢや。そして、老人にも子供にも男にも女にもみんなに自由なものぢや。誰れでもあの鐘を鳴らしさへすれば、裁判官はすぐに、正しい裁判をしてとらせる。」

町の人たちは、この王様の御言葉を聞くと、みんなが、つゝみきれないうれしさを抱えて、歸へつてゆきました。

それからの、町の人たちは、前よりも、すつと幸福な日をおくることができました。

恙うして、永い年月が経つて、まいりました。「裁判の鐘」は、いくどそのつとめを繰り返へしたことでせう。然し、こゝに、たつた一つ困まつたことが、できたのです。

三

さあ、その困まつたこと、いふのは、鐘にむすびつけられてあつた、長い綱が、雨や風にさらされたので、だん／＼腐さつてきたことなのです。

今までは、子供でさへ、らくに、引つばることができたくらゐ、ながかつた綱が今は、丈の高い人だけが、やつとのことで、手が届くほどみちかくなつてしまひました。

ある日、一人の裁判官が、市場を通りかゝつて、このみちかくなつた綱を見つけ、大そう驚きました。

「こりやいけない、これでは子供らは、可愛さうに、裁判も頼めまい。」

と思ひました。そこで、裁判官は、町の人たちに、どうかして、この綱をとりかへねばならぬと命付けたのですが、不思議なことに、この町には、綱といふものがどこを探しても、見つかりませんでした。

そこで、仕方もなく、町の人々は、野越え山越えて、はるか遠くの町まで、綱を買ひに行かねばなりませんでした。

それにしても、それらの人たちが、綱を買つて、歸へるまで、何か間に合はせておくものはないかと、そこら中を探させますと、大せいの中の、一人の男が、

「御役人さま。これならいかいでせう？」

と申し出しました。見ると、その男は、まだ、青々とした葡萄蔓を持つてゐるのです。生々しい葉がついてゐるのです。

裁判官は、それを見て、

「うむ！ これならりつばに役に立つ、長くて、丈夫で、一時の間に合はせには、

何よりだ。誰れか、これを、あの塔へ登ばつて結びつけてくれ。」

と申しますと、今の男は、すぐさま、高い市場の塔の上へのぼつていつて、古い綱のかはりに、この生葉のついてゐる葡萄の蔓をむすびつけました。

新たらしく、むすびつけられた蔓は、はじめの綱のやうに、ながく地面の上まで



も届きました。これでは、どんな小さな子供でも引つばることができまますので、人々も、この男の智恵を賞めました。

裁判官はこれを見て、

「あー、よくできた。これならりつばに役に立つ。」
と、さも安心したやうに申しました。

そこで、裁判官も、町の人たちも各自に、自分の家へ歸へつてしまひました。あ
とにはあの、生々しい葉のついた葡萄蔓が、地面の上に、ぶらさがつて居りました
ところが、こゝに一つ、また、大へんな事件が、もちあがつたのでございます。

四

さて、お話かはつて、この町のほとりに一人の老人が住んで居りました。

この老人は、今でこそ腰も曲がつて、弱々しいのですが、若い時は、りつばな大
將でございました。戦争といふ戦争には、いつも真先きに働いて、大そうなてがら
がありましたので、王様は、そのお褒美に、立派なお邸やら、土地やら、お金やら
をくだされました。

この大將は、一匹の名馬を持つてゐました。戦争のときには、いつも、この名馬
に、またがつて、生死の巷を往來した逸物でございませう。

お正月がいくども、いくども、やつてきては、この勇ましかつた有名な大將も
ひどい老人になつてしまひました。そればかりでなく、若いときとは、うつてかは
つた、大の吝嗇家になりました。

この老人の欲しいものは、お金ばかりなので、王様からいたゞいた、土地や、お
邸もみんな賣つてしまつて、自分は、見苦しい、さゝやかな、あばらやに入つて、
お金の一ぱいはいつてゐる大きな袋を抱えて、棲んで居りました。

さあ、かゝなつてきますと、あの馬が、邪魔になつて耐りません。まぐさをやる
のも腹が立つてなりませんので、誰れか買つてくれる人がありさへしたら、安く賣
つてしまはうと考へましたが、こんな老馬を買つてくれさうな人はありません。

老人はいよゝ／＼困まつて、とう／＼おしまひには、たゞでもよいから、誰れか買

つてくれないかと考へました。

役に立たなくなつた老馬にやるまぐさや、食べ物ものの代價おかしが、老人らうじんには惜をしくてならないのです。

けれ共ども、こんな跛ちんぱな老馬らうばを、たゞでさへ、貰もらつてくれる人ひとはありませんでした。老人らうじんは、いよ／＼呆あきれかへつて、

「おまへのやうな、こんな跛ちんぱになつた、役に立たない馬うまは、どこへでも勝手かたてに行つてしまへ。畜生ちくしやう!!」

と、可愛かあいさうにも、追おひ出してしまひました。そのむかし、勇いましい大將たいしやうを脊せにのせて戰場せんぢやうを、かけまはつて名なを謳うたはれた名馬めいばも、吝嗇けんじやく家けな老人らうじんのために、とう／＼宿やどなしになつてしまひました。

吝嗇けんじやく家けな老人らうじんは、これで厄介やくかい拂ひらひをしたと、内心ないしん、よろこむで居をりました。

宿やどなしになつた、跛ちんぱの老馬らうばは、どこへ、いつても、不幸ふかうな目めにあひました。

砂埃さごの澤山たくさん立つてゐる道みちを、ピョッコリ／＼歩あるいては、路傍ろばたの、硬こはい草くさを噛かみながら、逍遙せうやうてをりました。

幼こい子供こどもらは、遠とほくの方ほうから、石いしを投なげて虐いぢめました。犬いぬは足許あしもとへ寄よつてきて、吠ほえ立てました。この世よの中で、この不幸ふかうな老馬らうばを、庇護かほつてくれるものは、何なんにもありません。

五

ある暑あつつい日の午後ごごでした。

町まちの人ひとたちが、たいてい晝寝ひるねの、まつ最中さいちゆう、跛ちんぱな老馬らうばは、あの例れいの市場しちやうへ、さまよつてまゐりました。

何か食たべ物ものがありはしないかと、老馬らうばは、ひもじいお腹なかを、ペコつかせて見みまはしますと、あの、高たかい塔たの上うへからつりさげられた青あおい葡萄蔓ぶどうづるが、目めにつきました。

馬うまは、早速さつそく、青あおい葉はを食たべやうと、首くびをのばして、引ひつぱりました。

と、忽ち、彼の「裁判の鐘」が鳴りだしました。

鐘は高く響きました。そして、丁度、

「私を苦しめた。私を虐めた。早くきてくれ。助けてくれ。」

といふやうに、響きわたりました。

この鐘の音を聞きつけますと、十二人の裁判官は、早速、市場へやつてまわりま

した。

見ると、一匹の哀れな、老馬が、葡萄の蔓を、くはへてゐるではありませんか。

裁判官もはじめは、呆れて居りましたが、そのうちに、一人の裁判官は、

「見玉へ。ありや、あの吝嗇家の馬だ。そして主人に苦しめられたので、我々に裁

判を願ひにきたのだらう。知つての通り、あの老人は、この馬を、大へん虐ぢめた

のだ、こりや一つ裁判をしてやらすばなるまい。』

と、外の裁判官に申しました。

そのうちに、町の人たちは、

男も女も老人も子供も集り寄つ

て、どんな裁判があるのだらう

と熱心に見てゐました。

町の男たちは、この哀れな、

跛の老馬を見たときに、申合は

せたやうに、この馬が哀れにも

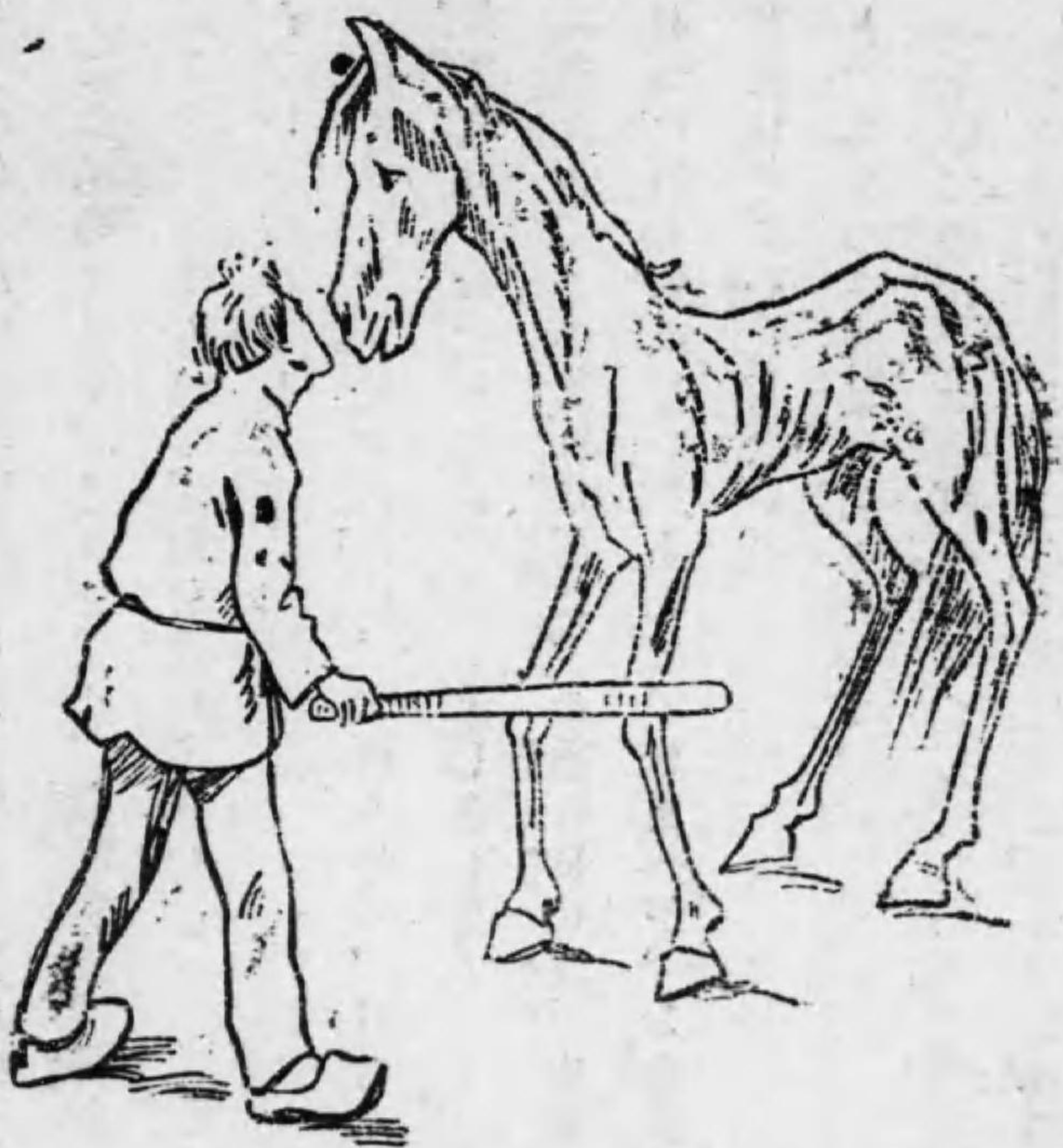
道を逍遙つてゐたことや、主人

の老人は金を算へて、家の中へ

すはつてゐるにもかゝはらず、

少しも食へものもやらず、世話

してやらなかつたことや、とう



裁判の鐘

とうおしまひに追ひ出してしまったことなどを、申し立てました。

これらのことを、きゝますと、裁判官は、聲をあらゝげて、

『その、けちんぼの老爺を連れて来い。』

と、いひつけました。

ほどなく、大せいの人に、つれられて、けちんぼの老人が、悄悄ときたときに、

裁判官は、おごそかに、申し渡しました。

『老人よ。この哀れな馬は、お前に長い間、忠實に仕へた、どんなに危険なことが

あつたかも知れない。そして、おまへが、お金をためたのも、この馬のお蔭だと、

言はなくちやならない。』

と、ちよつと言葉を切りまして、

『それなのに、お前は今になつて、この馬を餓死させやうとして、厩を追ひ出して

しまった。——これはその罰だ。お前は、お前の金の袋から、半分を馬に分けてや

らなくてはならぬ。それでおいしい食べ物と、温かい寢床とを作つてやるんだ。縁の草の茂つてゐる牧場で、うんと食べさせ、この馬の生命のある限り、快よい厩の中で平和な眠りを與へてやらねばならぬ。』

客齋家の老爺は、これをきくと、

『オー〜。』

と泣き出してしまひました。

お金の半分をこの馬にとられるのが、どんなに悲しかつたことでせう。

町の人たちは、これを見て、てんでに大きな聲で萬歳を唱へました。

そこで、この哀れな、跛な馬は、彼れの餘生を幸福に、豊かに送ることができました。

町の人たちは、これも、あの「裁判の鐘」のお蔭だ。

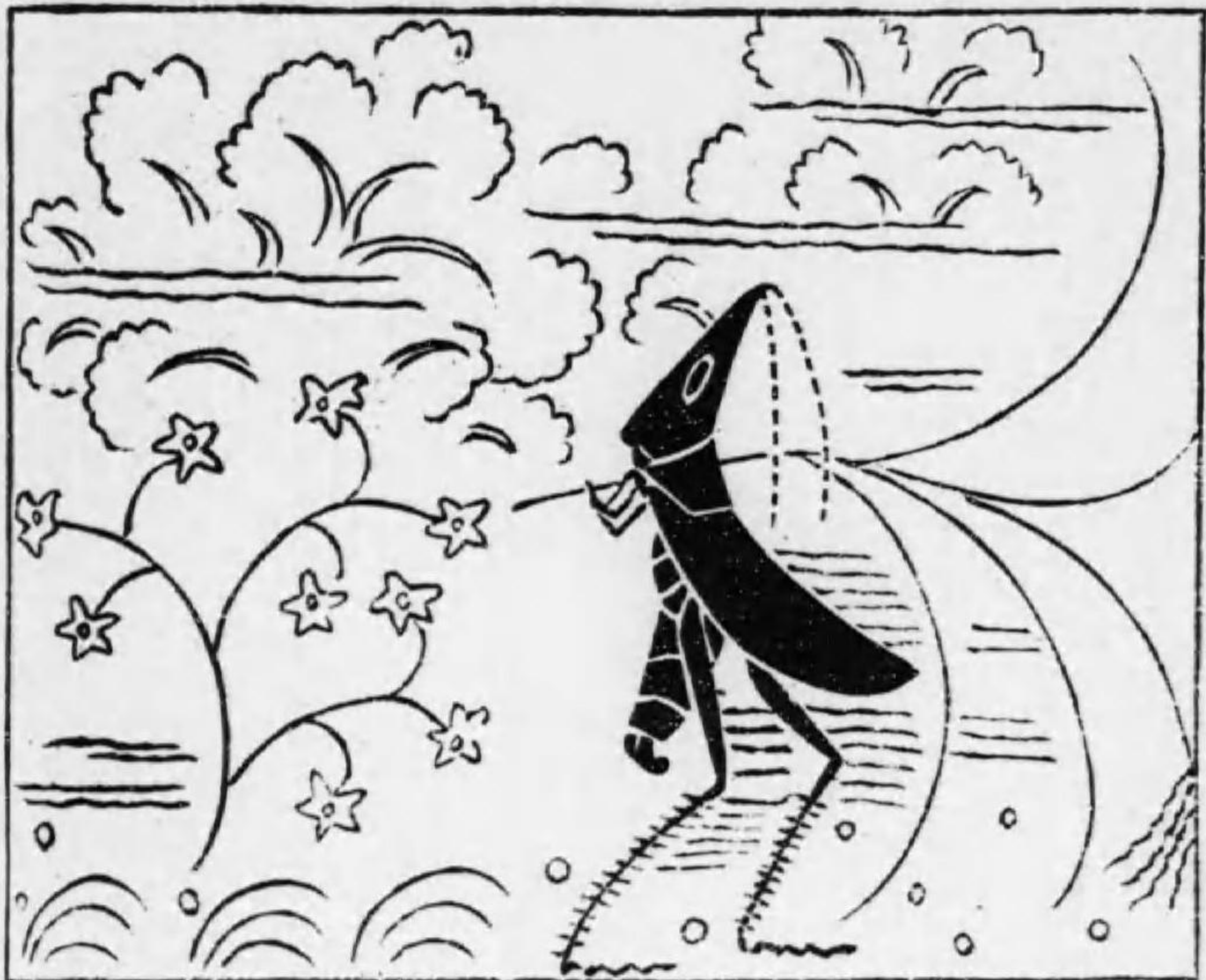
それにつけても、王様の御恩をわすれてはならぬと、思ひました。

裁判の鐘

一三六

上は民を慈しみ、下はまた王様を敬つて、此の國の人々は、永しへに天下泰平を
誓ひました。

(をばり)



ばつたさん (童謡)

戸村 都無

ばた〜〜〜
 ばた〜〜〜
 大ばつた
 小ばつた

す〜きのお宿が 怖いのか
 おみぞのかへると 仲悪るか

ばた〜〜〜 ばつたさん
 背中の小ばつた ばつたばた
 おひげを くる〜眼め ばちこ
 何故に あんよを曲げてるの

ばた〜〜〜 大ばつた
 ばた〜〜〜 小ばつた
 寒いお風が 吹き出して
 今夜のお宿はどこかいな。



籠つるべ

上

むかし、ペルシアに、一人の王様がございました。この王様は、大へん智慧のある、賢しい王様で、お氣立ての優さしい方でした。そして、とき／＼その頓智をはたらかせては、よろこんでおいでになりました。

で、あるとき王様は、一人の庭番を探さうとなさいました。

「王様のお命付なら、どんなことでも、せい出して怠けずにやる人間が欲しい。」
王様の御注文はさうだつたのです。

そこで、王様が、庭番をお探しになることを國中に、お布告を出しますと、さあ、西からも東からも、ぞろ／＼とやつてきた人たちは、みんなで、二百人餘りもあり

ました。

御殿の廣場に集まつた二百人の人たちは、誰れも「自分こそ、王様の庭番にならう。」と思ふ人ばかりでした。

御殿のお庭には、緑の濃い森がついてをりました。人たちはこの森の中で、王様のお出でを、今か今かと待ちもうけておりました。

やがて、王様はお伴も連れずおいでになつて、二百人の人たちが、ズラリと並んだ前をお通りになり、その中から一番敏活さうな、そしてまた温順さうな人を二人だけお選びになりました。

そこで王様は二人の者に向つて、

「御殿の庭に大きな籠がある。お前たち二人は、今から、井の水を汲んで、その籠に一ぱい溜めるのぢや。朕は、日の西に沈むころ見に来やう。そして、若し、朕の命じたことが、りつばにできてゐたら、朕は、二人に褒美を取らす。」

二人が、まだお答えも、せぬうちに、王様は、また御殿の中へ、お入りになつてしまひました。

二人は、すぐ、御殿の御庭に出て見ますと、なるほど、大きな籠があります。

すぐ、そのそばにはふかい井戸があつて、二つのバケツが、おいてあります。

それから、暫らくのあひだ、二人のものは何んのことと思はずに、一生懸命に、水を汲んで籠の中につきこんで居りました。

けれ共、なんで籠の中へ水がたまるわけがありません。つきこんでも、水はみんな、



籠 っ る へ

籠の目から、もつてしまひます。

これを見て、たう／＼一人の男は、

「なんだつて、まあ、王様はこんなつまらない、馬鹿げたことをなさるのだ。俺れたちがいくら汗を出して、水を汲んでも籠に水が溜まるはずがない。それこそ、百年かゝつて水は溜まるわけがない。馬鹿々々しいことだ。」

と言ひました。

すると、ハツサンといふ、も一人の男は、

「でも、こりや、わたしたちのつとめぢやないか。王様は、水をはこばせるためにわたしたちを、お雇ひになつたのだ。そして、これはみんな王様が御存じのうへなんだ。またもし、この仕事がりつばにやれたなら、王様は、わたしたちに、お褒美を下さるとさへ仰言つたもの、それ以上望むことはあるまい。」

と笑ひながら申しました。

恚う言ひながら、ハツサンは、
休みもせず一生懸命で、水を汲
んでは、籠の中へ注ぎこんでをり
ました。

はじめの男は、これを見て、

「そんなら、お前へはどうとも勝
手にするがいゝや。わたしは、ど
んな結構なお褒美をいただいたつ
て、こんなつまらない、馬鹿げた
ことはできやしないから。——。」
と、ブツ／＼言ひながら、手にも
つてゐたバケツを、そこへほうり



だして、どこともなく行つてしまひました。

ハッサンは、そんなことには、ちつともかまはず、やつぱり、バケツに水を汲んで運びました。

頭の上を、お日様が、とつくに、通りすぎたことさへ、ハッサンは知りませんでした。

下

お日さまが、西の方へ傾いて、日暮れちかくなつたころには、さしも深かつた井戸の水も、どうやら、空虚になつてしまひました。

見ると底の方に少しばかりの泥水があるばかりです。

「もう、井戸も空虚になつてしまつた。バケツに一ばいほども、のこつちや居ないくたびれた〜。」

ハッサンは、獨言をいひながら、おしまひの水を汲みとつて、籠の中へ、注ぎこ

みました。すると、何やら、大へん強い光りが、水の中で、キラリとしたので、何

があるんだらうと、ハッサンは驚きながら、手をさし入れてつまみだしてみますと、それは一つの美しい金の指環なのでした。

「あー、これだ、これだ、これでこの仕事のわけがわかつたわい。もし、王様が、たゞこの井戸の水を空虚にせよと、仰言つたらわたしは、きつとこの水を汲みだしては、地面にぶちまけたことだらう。——さうしたらこの尊い金の指環は見つからなかつたらう。」

ハッサンが慙ういつてゐるところへ、丁度王様が、おいでになりました。もうお日さまは、西の山へ沈んでしまつて御殿の森



が、まつくろく見えまして。

王様は、ハッサンが、あの金の指環を持つてゐるのを見て、すぐ、御自分の欲しいと望んでをられた人間を見つけ出したと、お思ひになりました。

ハッサンは、丁寧に頭を下げて、今までのことを、包まずに申しあげますと、王様は大そう、およろこびになつて、この尊い金の指環をハッサンにくだされました。そしてまた、ありがたい御言葉をくだされました。

「おまへは、よく、こんな小さなことできへも、りつばにやつてくれた。これはその褒美ぢや。——朕は、おまへのやうに、影日向なく、はたらいてくれる、正直な人間が欲しかつたのぢや。朕は、このほかの、すべてのことにおまへを信用することができる、今日から、おまへは、朕の家來の首長ぢや。朕はおまへを、今日から家來の首長とせうわい。」

ハッサンは、涙を流して、このありがたいお言葉を受けました。

庭番のハッサンは、それから、王様の、りつばな家來になつて、一生幸福に暮らしました。

これといふのも、ハッサンが、小さなことにもせいでして、影日向なく、はげんだ賜ものでございます。

「出精は幸運の母なり」

(をばり)



慾ばり粉屋 (童話)

半太郎といふ、大へん慾ばりな、粉屋がありました。半太郎は生れつきの、大の慾深やで、いつでも、金もうけのことばかり考へてゐるのです、何が好きだつて

お金ほど好きなものは、世の中になんといふほどです。もし、人が、たれか、金持ちのことを、話しますと、半太郎は、すぐ、「あー、あの人がいい。ありや、俺れの、つきあひ友だちだよ。」と、得意になつて、申します。そのかはり、だれか、貧乏人のことでも話さうものなら、よし、それが、自分の、無二の友だちでも、知らん顔して、どこに、そんな人間があるのだといつたやうに、へいきな、顔をしてはゐました。これで、見ると、半太郎先生、いかにもおつきあひの、友だちを、選りによつて

金持ちばかりを探してゐるやうに見えますが、まったく、そんなことでもなく、ほんのうはべをかざりたいばかりなのです。

金持ちになることは、ほんとに、半太郎の大好きな、ことなんです。金持ちとつきあひなんかは、一度も、したことはありません。もしか、金持ちと、つきあひでもしやうものなら、それこそ、金がかゝつて大へんですもの。

『どうかして金持ちになつて見たい。金が欲しい。』
と、思ふことは、實に、熱心なんです。半太郎は、まったく、貧乏な粉屋でした。

生業の、粉屋の収入といふものは、少しばかりです。けれど、これを、やつてさへゐたら、食ふには、事欠かさず、月々、二圓や、三圓の金は、貯められるのでした。

けれど、こんなことぢや、元來、満足のできない男なんです。

一時に、大金持ちになつて見たい。思ふさま金の勘定がして見たい、とばかり考へてゐました。ところが、ある日、半太郎は、大へん、耳よりな、話しを、聞きました。

けました。

といふのは、

すぐ近所の三五郎といふ人が夢を見て、金の埋めてあるのを見つけて、一時にまとまつた大金



を掘り出したといふことなんです。もし、これが、半太郎先生だつたら、先生どんなによろこんだかわかりませんが、なにに、人のことでも、くやくして耐りま

せん。

半太郎は、しばらく考へてゐましたが、

『さうだ。さうだ。俺れなんて、まあ、朝は早くから、夜はおそくまで、頭から粉だらけになつて、働いても食ふだけが、關の山だ。それなのに、隣の三五郎奴は寝てゐて、夢を見ただけで、一晩中に何千圓といふ大金を稼せぐことができたのだに、俺れだつて、三五郎奴位ひの、夢が見られぬわけはない。きつと、夢を見ることができる。そしてまあ、何千圓といふ大金を掘り出したら、どんなにうれしいだらう。すばしつこく、金を運んで、かくしてしまつて、鼻にさへ見せるものか。山のやうに積みあげた、山吹色のお金を、腕を突つこんで、かきまはすときには、まあ、どんなに、氣持ちのいゝことだらう。』

さう、思つてくると、粉屋なんか馬鹿々々しくつて、やつてはをられません。

少しばかりの、貯めたお金をもつて御米を買つて食べてゆけるといふので、粉屋

の生業は、休んでしまひました。

いま、で、ついでにきてきた、得意客も、これには、呆れかへつて、しまひました。

そしてみんな別の方の粉屋へいつてしまひました。

半太郎は、そんなことには、ちつとも頓着せず、毎日、毎日のぞみを、くりかへしては、つぶやきどほしでした。

夜になると、半太郎は、天下でもとつたやうに、大よろこびで、よい夢を、見たばかりに、早々から、床の中へもぐりこむのでした。

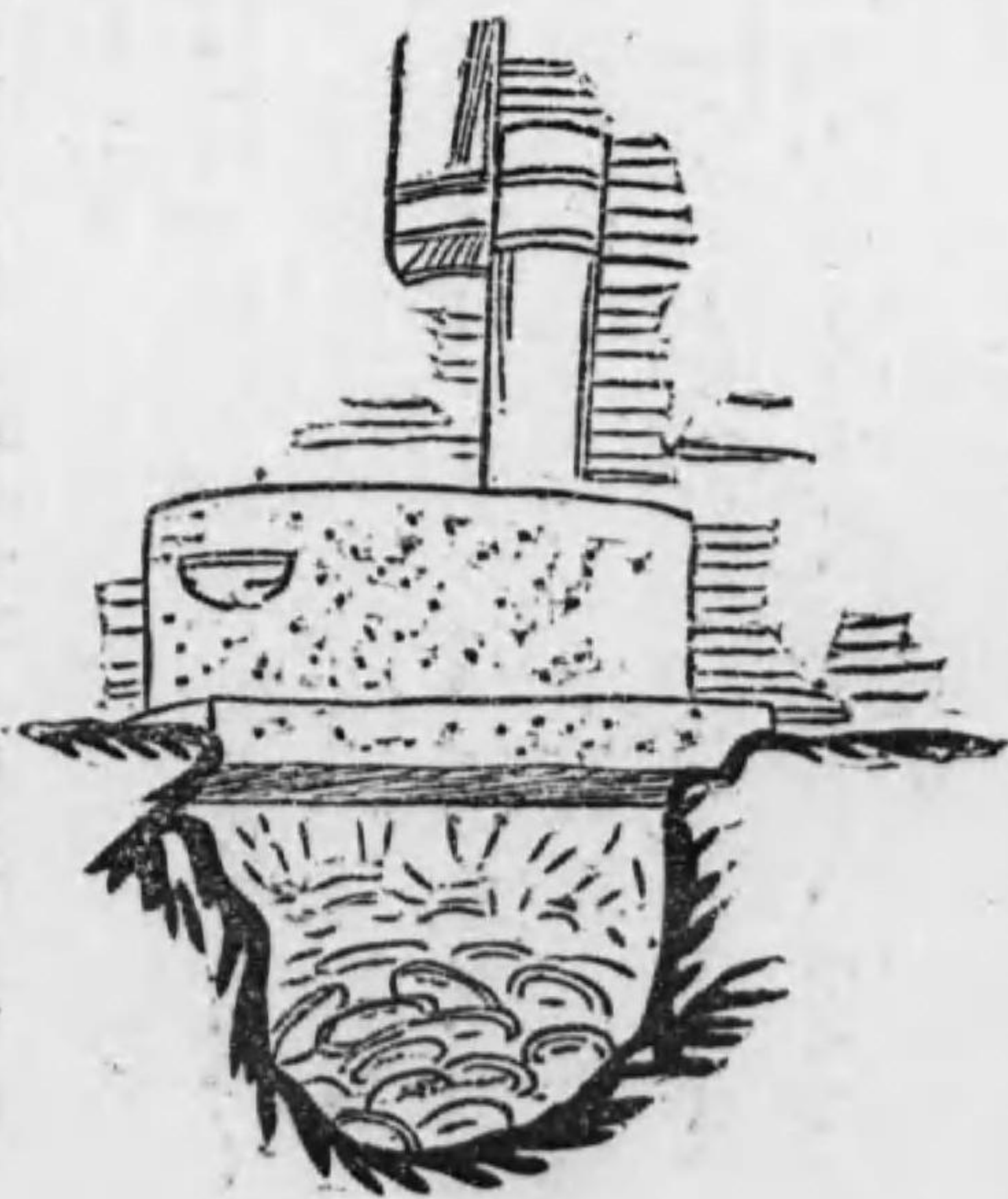
福の神といふものが、もしもあるなら、長いこと、ちつとも、半太郎の家へは、まいりませんでした。半太郎の熱心に、感心したのですか、とう／＼、やつてまゐりました。

といふのは、五六日目の晩、半太郎が、まことに、結構な夢を見たのです。夢には、粉屋の、石臼の下に、何千圓といふ、お金が埋められてあることが、あ

りくと、わかつたのです。
 としてその上には、大きな、平たい石が、ふせられてあることさへも、はつきりと、わかつたのです。

金の夢を見たら人に言ふな、人に言へばその夢は消えてしまふんだとは、半太郎がよく小さいときから、聞かされたことなので、さすがに、そのことはたれにも、話しません。

同じ夢を二晩つゞけて見なければ、だめだといふことも聞いてゐたので、そのまゝ二晩目にも、また、どうか、昨夜の通りの夢を見られるやうにと、心で神さまに、祈りながら床にもぐりこみま



した。ところが、半太郎の、望み通り、いかにも前の晩と、寸分ちがはぬ夢を重ねて見ましたので、もうもう疑ふことは、みぢんもないと半太郎は心の中で、「占めたぞ。」と思ひました。
 で、その翌る朝は、早くからとびおきて、妻にも言はず、獨りて鶴嘴しを、擔いで粉屋の石臼のところへでかけました。



そこで、いよいよ、夢で教はつた場所と思ふところを、コッ／＼と掘りはじめました。

最先きに、ツルハシのさきで、掘りだされたのは、盃の、破片でした。

それから、だん／＼と掘り下げて、いつて、とう／＼しまひに柱の土臺石を、掘り出してしまひました。

これは、まだ、新たらしい、しつかりとしたものでしたが、そんなことは、言つてをられません。

それから、なほ／＼一生懸命で、掘り下げますと、例の夢で見たとほりの、平たい石につきあたりました。

ところが、それは、おそろしい大きな石でとても、半太郎の、脛腕では、動きさうもありません。

『こりや、なか／＼大きいぞ。さうださうだ、この石の下なら、よほど、たくさん

の、お金、埋まつてゐるだらう。こりや、家へ歸つて、嗅をつれてきて、手傳はせやう。いままでのことを、話してきかせて、手傳はせてやらう。』

ところが、半太郎の妻君といふのが、なか／＼、半太郎にも負けないほどの、慾ばりやなのでした。

この話しをきいたときの、喜こび方といつたら、それは、それは、おそろしいほどでした。

躍りあがつて、半太郎さんに、とびついてよろこびました。いま／＼でに、こんなよろこび方をしたことは、ありません。

ところが、この、よろこびも、糠よろこびだつたといふことがわかりました。

二人は、大いそぎで、例の場所へかけつけて、力一ぱいに、平たい石をおこして見ますと、さあ大へん、なんにもありません。

半太郎夫婦は、狂人のやうになつて、くやしがりしましたが、お金のでるわけがあ

りません。

自分が掘りくづした、粉屋の水車小屋が、りつばな財産だつたのです。けれども
それさへ、いまは役に立ちません。

半太郎夫婦は、それから、前よりも一層貧乏な日を送らねばなりませんでした。
これといふのも、やつぱり、半太郎の慾ばりの罰だと、近所の人たちは申しまし
た。

(をばり)

石 鹼 玉 (童話)

しやぼん玉

ブーッと吹けば

赤い玉

青い玉

一しよになつて

天まであがる



しやぼん玉

そつとのぞけば

青い顔

白い顔

一しよになつて

アツハツハー





三つの希望（童話）

むかし、大そう貧乏な、樵夫の夫婦が、森の中の汚い小屋に棲んで居りました。

で、樵夫は、まいにちまいにち、大きな重い斧を擔いで、森の中へ、木を伐りにゆくのでした。

樵夫は、毎日、せい出して働きました。顔中汗だらけにして、朝から晩まで働けどほしてしたが、いつも貧乏な日をおくらねばなりませんでした。

夕方になつて、ペコ／＼になつたお腹を抱へて、歸へつてきても食卓のうへにはいつもきまつて、まづい、乾パンばかりでした。

それで樵夫は、斧をふりあげて、仕事をしながらも、いつも、つまらない、つまらない。と考へました。

「俺は、こんなに、汗を出してはたらいでも、おあしものこつたことはない。やつとのことで、妻と二人が、命をつないでゐるだけのことだ。あー、詰まらない。詰まらない。世の中で、俺れぐらゐ貧乏な、不都合な人間はまたとあるまい。」
時々、そんな愚痴をこぼしました。

ある日のことでした。樵夫はやつぱり、つまらない、つまらないと思つて、まへのやうな愚痴をこぼして居りますと、突然目のまへに、まつしろな着物を着た、白髪のお爺さんがあらはれました。

樵夫は、おどろいて立ちあがりますと、それは、この森の神さまだつたのです。そこで、神様は、樵夫に向つて、

「お前へは、まいにちくつまらないくと愚痴をこぼしてゐる。そこで、今日から、おまへを、仕合せな人にしてやらう。おまへの望むでゐる三つの希望を、叶へてやる、なんでも、おまへの希望のうち、三つだけを選ぶがよい。」



三つの希望

と、いふかとおもうと、神様の白い姿は、掻き出したやうに、どこへやら消え失せて、後には、樵夫が、斧を杖にして、ポンヤリと立つてをりました。

「さうだ。今のはたしかに神さままだ。そして私れに、三つの希望を叶へさせてくださるのだ。もうくこれからは愚痴もこぼすまい。早やくかへつて嬾にも聞かせてよろこばせやう。」

樵夫は、元氣のよい顔で、ニコニコ家へ歸へつて行きました

小屋へかへりますと、樵夫の妻はブリク憤つてゐます。

『おまへさんはまあ、どうしたといふんです。まだこんなにお日様の高いうちからのこ〜歸へつてきて。それだからいつも貧乏してゐるのぢやありませんか。』
樵夫は、それでも、相手にならず、ニコ〜笑ひながら、今日、森の中であつたことを話しました。

森の神様から、三つの希望を叶へさせていたけると、聞いた樵夫の妻の、喜悅は、まあ、どんなだつたでせう、さつきまで、ブリク〜憤つてゐたのが、てんで、生れかはつたやうに、躍りあがつてよろこびました。

『まあ、ゆつくり、おらつて、腰をおろせ。そして、何を、お願いしやうか考へて見やう。』

二人は、腰をおろして、何を、神様に、お願いしやうかと、てんでに、考へはじめました。

ところが、樵夫は、このとき、大へん、お腹が空いてゐました。そこで、
『俺は、腹が空つて耐らない。何か食べたいな。食べながら、ゆつくり考へるとしやう。』

と言ひました。貧づしい樵夫の夫婦は、いつもの食卓にむかつて、乾パンを食べながら、さて、何をお願いしてよいかと、話し合ひました。

『うむ、大金持ちになることも出来る。』
と樵夫が申しますと、妻は、『りつばな、廣い邸宅を、お願いすることも出来ますよ。』



と申しました。

「まだ、それから、俺れたちは、王様にもお妃にもなることが、できるんだ。」

「妾しらは、また、金や、眞珠や、ダイヤモンドを、お願ひすることもできます。」

二人は、それから、それへと、欲しいもの望みたいものを、話しつゞけましたが

まづ第一に、何を、お願ひしたのか、考へがつきませんでした。

樵夫は、大へんお腹が、空つてゐたのですが、食べるものといへば、いつもの、

まづい乾パンだけしかないので、大へん不服だつたのです。

そしていつか食べたことのある、ソーセイヂ(腸づめ)の、大へん美味かつたこと

を、思ひ出しました。

そして、つひ、あとさきの考へもなく、

「あー、ソーセイヂが食べたいナ。乾パンばかりぢや、うまくない。あの、美味し

いソーセイヂが食べたい。」

と、口に洩らしします、あら、ふしぎや、その語の、終るか終はらぬに、大きな、

ソーセイヂが、ビョッコリと、食卓の上へ、出てまいりました。

樵夫の夫婦は驚いて、このソーセイヂを見つめてゐました。

なんの氣なしに、口に出したものの、いまとなりては、そのとりかへしもつかず

樵人は口惜しくてたまりません。

これを見た樵人の妻は、さあ顔を火のやうにして、憤り出しました。

「まあ、この馬鹿な人には驚いた。お前さんは、こんなつまらないソーセイヂなん

かいどれほど好きか知らないが、もうこれで、一つの希望は消えてしまつたのぢや

ないか。」

妻は、泣き出しさうに叫びました。

さう言はれて見ると、樵夫もそのとほりなので、一言もありません。呆れて、ソ

ーセイヂを憎くらしさうに眺めてゐましたが、

『でも、まだ、二つの希望があるよ。大金持ちになること、それから王様とお妃とになることもできるんだから。』

と、言ひました。妻は、やつぱり、泣きさうな聲で、

『大金持ちや、王様とお妃とはなれるかも知れないが、金や真珠やダイヤモンドを、お願ひすることが、どうしてできます。お前さんの馬鹿にも、呆れてしまったこんな詰まらないソーセイヂを、望むなんて……妾しだつたら、こんなつまらないことはしやしない、金や真珠や、金剛石よりも、ソーセイヂが、お前さんの好物なんだなんて、まあ、呆れた馬鹿だ。馬鹿だ。馬鹿だ。大馬鹿だ。』

妻は、狂人のやうになつて、樵夫をのしりました。そればかりでなく、もつともつと夫の、缺點探しを、はじめましたので、さすがの、樵人も怒つてしまひました。

人間は、怒つたときには、よく、後先きの考へがつかなくなるものです。いま、



三つの希望

樵人は餘り怒つたので、つひまた

『五月蠅い奴だナ。このソーセイヂが貴様の鼻の先きへぶらさがればいゝに。』

と、怒鳴りました。すると、さあ大へんです。忽ち、食卓の上の、あの大きなソーセイヂは丁度、生れつきもつてきた瘤見たやうに妻の鼻の、先端へ、ぶらさがつてしまひました。

樵人の妻は、驚くよりも、狂人になつたといつた方が、よいくら

ひに泣き出しました。

鼻の先きへ、ぶらさがつたソーセイヂは、いくら引つばつたつて、とれさうにも
 しません。もつて生れた、肉瘤と少しもちがはないやうに見えました。
 今度は妻は悲しくなつて、おろ／＼とした聲で、愚痴を言ひました。

「あー、あー、お前さんにも、呆れかへつた。はじめに、あんなつまらないソーセ
 ーヂを望み、また、今度は、こんな無法な、望みをするなんて。これでもう、二つ
 の希望が、なくなつてしまつたのぢやないか。たつた一つの希望しかないもの、こ
 んな馬鹿げたことはない。」

鼻の先きに、大きなソーセイヂをぶらさげられた、滑稽な顔の樵人の妻は、叫び
 ました。

まつたく、その通りなので、樵夫も大へん氣の毒にもなりましたし、また、大き
 な損をしたとさへも考へました。

三つの希望の中で二つは、もう、なくなつたので、のこるはたつた一つ。これで
 一番よい希望を叶へて貰はうと考へました。

一番よい願ひは、やつぱり王様とお妃とお願ひするよりほかは、ありませんで
 した。

そこで樵夫は妻に向つて、

「全く俺れは、馬鹿だつた。けれ共俺れは王様になりお前へはお妃になることがで
 きるのだよ。」

これをきくと、妻は、なほさら、泣き出して、

「いくら、王様とお妃とになられても、私しのこの鼻はどうなるんです。ごらんな
 さい、この大きな、ソーセイヂは誰れがぶらさげたんです。こんな鼻をしてゐて、
 なんでお妃に見えるものかね。こんなつまらないことはない。あゝ、やつぱり、元
 の通りの鼻をして、一生貧乏な、樵人の妻で暮らすのが、一番好い。かうなつたの

も、みんなお前さんの故だ。早く、このソーセイヂを、元の通りに、取つてくださ
い。」

と、申しました。

樵人も、たつた一つの希望で、そんなことを願ふのは、いかにも口惜しかつたの
ですが、それも、みんな、自分の故だと、いはれて見れば、全くその通りなので、
氣の毒になつて、

『そのソーセイヂが、どうか、なくなるやうに。元の鼻になるやうに——。』

と、祈りますと、いままで、ぶらさがつてゐた、ソーセイヂは、どこかへ、消え失
せて、妻は元のやうな鼻になりました。

とはいふものゝ、折角、森の神様から、授かつた、三つの希望も、これで、みんな
消えてしまひました。

樵人夫婦は、またく元の通りに、いつもく貧しい日を送らねばなりません

した。

樵人はやつぱり、大きな、重い斧を擔いで、森の中へ木を伐りに行きました。
そして一日中汗を出して働いて歸へつても、食卓にはいつも、乾パンがあるばかり
です。

樵人は、やつぱり、つまらない、つまらないと、愚痴を、こぼしました。

『なんて、俺は、不幸な人間だらう。世の中で、俺れくらひ、不幸な、貧乏な人
間は、またとあるまい。つまらない。つまらない。』

樵人は、よく、さう言つて獨語を呟くのでした。

けれども、もう、森の神様は、あれつきり姿を見せません。

樵人は、慙うして、三つの希望を許されたのですが、その一つも叶へることがで
きませんでした。

大金持ちになることも、王様とお妃とになれることも、金や、眞珠や、金剛石も